
博麗神社神器盗難事件

春風夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博麗神社神器盗難事件

【Nコード】

N6824U

【作者名】

春風夜風

【あらすじ】

博麗神社の宝物殿から大切な神器が盗まれた。カンカンになった霊夢は魔理沙も巻き込んで犯人の追跡を開始する。次第に明らかになる幻想の平穏と、事件の背後に見え隠れする巨大な闇とは……？ 当作品にはオリジナルキャラ及びオリジナル設定を多用していません。耐性の無い方、あるいは嫌悪感を持たれる方にはお勧めできません。なお、この注意書きを無視したいかなるトラブルに当方は一切責任を負いません。以上の事をご留意頂ける方のみ先に進まれますようお願いいたします。

Side A

地獄の底から声がする。

闇が、蠢いている。

月の無い夜だった。

門かんのきに掛かった錠前を弄ると、錠はあっけなく外れていった。扉を押すと、音も無く障害が取り払われる。あまりに簡単で、シロにとっては拍子抜けだった。対する検分役のクロは、見事なものだと半ば呆れながら眺めていた。

時刻は既に深夜になっていた。草木も眠る丑三つ時。博麗神社の境内裏に、二人の男はいた。

深夜の神社は薄暗く、主も寝静まった境内は、不気味な静けさに包まれていた。手水舎の水の音がやけに大きく聞こえる。それ以外は虫の音さえ無い静寂だった。だからこそ、二人の拳動は不審を極めた。

「目当てのモノは分かっているのか」

クロがそう言った。大きな男だった。黒のスーツを見事に着こなし、頭は剃っているのか綺麗な丸だ。精悍な顔つきで、しかし、目の奥はサングラスに隠れて見えなかった。

「ガキのお使いじゃ無えんだ。黙って見てな」

しかしシロは、クロの言葉をはねつけて、大いに不快を示した。地面に向かって唾を吐く。クロはそんなシロを楽しんでいる様だった。

シロ。

それがこの男の名前だった。由来は頭の若白髪。どういう訳か、

物心ついた時からの白であった。周りの人間はシロだシロだと囁はやし、その内自らもシロと名乗る様になった。

シロに自分の名前への未練は無かった。問題らしい問題とさえ、裏の仕事をするにしては、すぐに顔を覚えられてしまうという事のみであった。

シロが世間から憚れるような仕事に手を染めたのは、十年以上も昔の事だった。悪と呼ばれるような事は一通り経験した。シロは自分でその道を選び、今もそれを後悔はしていない。自分が極悪人だという自覚はあったが、自分など遙かに及ばない悪がいることもシロは知っていた。

今回の依頼主である“組織”は、まさに、シロに輪を掛けたような悪党だった。

組織がシロに依頼したのは、博麗神社の宝物殿ほうもつでんに奉納されている“あるもの”を盗み出すことだった。小柄の体躯だが、腕は確かと評判だったシロは、組織からも高く買われていた。既に前金も支払われ、また、その額から言って、シロに断る道理は無かった。組織が“それ”をどう使うかなどシロには興味が無い。そうやってシロはこの地にやって来たのだった。

一方、検分役として派遣されたクロは、組織直属の構成員だった。クロの任務は、シロのサポートと監視だった。クロ自身も楽な仕事と安請け合いしたままで、シロにも今回の仕事にも特に感慨は無かった。

シロが宝物殿に入った。見ると、手入れは行き届いているようで、埃の一つも存在しなかった。狭い部屋で、入り口から直線に祭壇がある。そこに目当てのものが安置されていた。

博麗神社神器。

それが今回のターゲットだった。

神器は深い紺の麻布で包まれ、中を見る事は出来ない。しかし、ある種の威圧の様なものが確かに発せられ、それが目当ての神器だということは一目でわかった。シロはそれに手を伸ばした。

「間違い無い。こいつだ」

「その様だな。では引き上げるぞ」

そして、シロたちは全ての痕跡を消して立ち去った。境内に真の静寂が戻る。シロの手から、布と中のモノが擦れる音がした。

(……あとは組織に引き渡して、報酬を受け取るだけだ)

シロはそう思っていた。もちろん横を歩くクロも、同様な感想しか持っていなかった。何という事も無い。単純な盗み。シロもクロも、まだ、その程度のものとしか捉えていなかった。

その時、霧雨魔理沙は大変機嫌が良かった。

幻想郷の朝は、濃い霧に覆われていた。山から下りてくる湿った空気が、紅魔湖で霧を発生させているのだ。発生した霧は港の町まで覆ってしまう。ひっそりと静まり返った霧の町は、どこか神秘的で、幻想的であった。

魔理沙は上空からその様子を眺めていた。箒に対して横向きに座り、ぼうつと眼下を眺めている。新聞配達員の自転車が見えた。耳を澄ますと、どこかで犬の鳴き声や、店のシャッターの開ける音も聞こえる。徐々に覚醒を始める朝の町は、それはそれで趣があった。たまには早起きを試してみるものと、今更ながらに思った。

(……気分が良いと景色もよく見えるものだなア)
知らず知らずの内に顔が綻ぶ。魔理沙の機嫌は、ますます上々であった。

魔理沙の笑みには理由があった。魔理沙は、大事を終えたばかりだったのだ。

魔理沙には期限が迫っている仕事があった。魔法誌に掲載する論文の執筆を依頼されていたのだ。世界的に権威のある有名誌である。上手くいけば主張が認められ、自分にもスポンサーが付くかもしれない。潤沢な資金と設備。魔理沙には夢の様な話だった。

それゆえ魔理沙は、数日前より缶詰になって論文を綴っていたのだが、昨夜、ようやく原稿が完成した。今回は魔理沙にとっても自信作。さっそくそれを寄稿し、魔理沙はようやく一息ついた。未来への期待と重役からの解放。魔理沙の機嫌の良いは、これが起因していた。

ふんふんと鼻唄を歌いながら、魔理沙は友人の家に向かっていた。博麗神社には、博麗霊夢という同年の知り合いがいる。なんとと言っても神社の朝は早い。霊夢はとうに活動を始めているだろう。魔理

沙は、自分の大事の報告をしようと、また、朝食がまだだった魔理沙は、ついでにご相伴預かろうなどと考えていた。

森の緑の中に朱の鳥居が見えた。そのうち拝殿も見えてくる。神社の中に人影を見つけた。霊夢だろうと思った。

着地の為に高度を下げると、魔理沙は神社に異変を感じた。

「何だ、あれは……？」

妙であった。神社の麓にある石鳥居、その前の道に、何台もの自転車があった。ただの自転車では無い。後ろの箱には桜の御紋があった。

何かが起こった？

魔理沙は大急ぎで霊夢の元に向かった。

魔理沙が辿りついた時、神社の境内は、黄色いテープで囲まれていた。物々しい雰囲気の中、制服を着た数人の警官を見た。誰も彼も怖い顔をしていた。ただ事では無いと、魔理沙は十分に感じていた。

社務所の開け放たれた居間の中に、憔悴しきった霊夢の姿を見つけた。魔理沙は急いで駆け寄った。

「霊夢？ ああ、何てこつたい。何をやった？ 何をやったんだ！」

魔理沙は心配のあまり、つい大声を出してしまった。霊夢は気が動転しているのか、顔を向けるだけで反応が無い。わずかに眉をひそめるのみだった。

「……は？」

「ああ、言っな。分かっている。お前は悪くない。悪いのは全部貧乏のほうさ。大丈夫、分かっている。私はお前の味方だ」

霊夢。私を信じる。例えば犯罪者になつたとしても、私はずっと友達さ。

その時魔理沙は、己の正義の為に、大いなる決意を固めていた。友を見捨ててはおけない。どんな場所に居ようが霊夢は友達だ。魔

理沙の人情がそうさせたのであった。

しかし……、と魔理沙は考える。霊夢はまだ若い。未来がある身だった。こんな所で霊夢の将来を棒に振っていいのだろうか。否、良くない。

魔理沙は、また、新たな決意を胸に抱いた。任せておけ、霊夢。私が守ってやる。まだ霊夢を犯罪者にする訳にはいかない。魔理沙の心は実にそれであった。

魔理沙は、作業を続ける警官の元に向かった。そして、万引きで捕まった娘を想う母親が如く、実に勇壮なる振る舞いで制服に迫ったのだ。

「こら、よく聞けよ。クサレ公僕ども。霊夢は確かに貧乏だがな、だからって盗みを……」

「あんたが話を聞けーッ！」

警官たちが振り向いた、その前に。

魔理沙は抗えぬ巨大な力で以て、後ろへ引き倒された。瞬間、振り下ろされた手刀は綺麗に眉間を捉えたのだった。

「……なるほどな。そんならそうと早く言えば良いのに」

魔理沙は、眉間に感じる違和感を気にしながら、朝食のおにぎりをかじった。薄かった。

「まさか自分を犯罪者にされるとは思わないでしょ、普通」

対する霊夢は、もう済ましていたのか、ただミルクココアをすするのみだった。

神社の鳥居、その下の階段に腰かけて、魔理沙は、すっかり朝食をご馳走になっていた。社務所や境内は、現場検証が行われて動けない。追い出された霊夢は、面白くなく頬杖をつき、魔理沙が食べのを見ていた。まだ機嫌の直らない霊夢は、魔理沙の耳を引っ張ってみた。痛い。と魔理沙が言った。

……霊夢は何もしていなかった。霊夢より真相を聞いた魔理沙は、

ようやく万引き犯の汚名を撤回した。霊夢の話によると、霊夢は被害者の方らしい。考えてみれば、この霊夢が、そうそう足のつくような間抜けをする筈が無い。魔理沙はそう確信し、かつ納得した。事件のあらましはこうであった。

博麗神社には奉納された宝物を祀る宝物殿があった。裏の倉庫と隣接する古い建物である。中には大事な品が数多く安置され、霊夢もこの管理だけは神経質になっていた。それゆえ霊夢は、昨晩も見周りを怠らなかつたし、扉にも鍵を掛けてから就寝に着いた。何の異常も無く、何の心配も無い。そう思っていた。だが翌朝。虫の知らせとも言うのだろうか、ふと中を開けて確認してみたところ、奉納されてあつた神器が無くなつていたので。

「そりゃあ、災難だつたな」

「ホント、最悪よ。絶対許さないんだから」

霊夢の機嫌は至つて悪い。この後も『絶対に許さない』を連呼していた。それもそのはず。盗まれた神器は、霊夢にとって、とても大事なものだつたのだ。

神器は幼い頃から霊夢の管轄で、霊夢は日々の管理を欠かさなかつた。毎日毎日綺麗に清掃し、あるいは、神器の存在が日常の一部と化していた。当然、神器に対する霊夢の愛着も深かつただろう。あるはずのもの、あつて当たり前のもが無い。霊夢の怒りはもつともであつた。

魔理沙は、霊夢の話を黙って聞いていた。神器を語る霊夢の目は真剣そのもので、魔理沙は、妙な事にならなければいいがと思つていた。

しばらくすると、現場検証が終了したと警察から報告があつた。警察の話によると、用意の周到さから考えても、場当たり犯とは考えにくいとの事であつた。かなり高度な技術を持った者による計画的な犯行らしい。霊夢は神器の所在を心配したが、すぐには分からないと言われ、そうですかと返した。

警察が帰り、しばらくすると、霊夢は立ち上がった。

「オイオイオイオイ。どうする気だ。まさか自分で探す気じゃないだろうな」

「……とにかく、アレは絶対に取り返さなくちゃ」

魔理沙は霊夢の顔を盗み見た。彼女の双眸そくめつには烈火の怒りが宿っている。霊夢が何を考えているか、魔理沙には手に取る様に分かった。

「ぱちん。魔理沙は額に手を当てた。霊夢の悪いクセだ。すぐに一人で背負いこもうとする。」

「探すったって、どうやって探すんだよ。心当たりも無いだろう？」

「でも、放っておけない」

にべもない。霊夢は本気で探すつもりの様だった。魔理沙の眉間の皺がますます深くなる。危なっかしくて見ていられなかった。

「……分かった。なら私も付き合うよ。何にしる、手は多い方がいい」

魔理沙は、立て掛けていた箒を持った。どうせ止めた所で聞きはしない。だったら、一緒に行動した方が良いと考えたのだ。

「何か分かるの」

「さあな。でも、何か知ってそんな奴なら、一人知っている」

盗まれたのは神器。普通の人間には全く価値の分からない物。ならば、必ずどこかに流して、金銭に替える筈だった。そして、そういう流通に詳しそうな人物を、魔理沙は知っていた。

「どうせ暇を持て余しているんだ。冷やかしいでに寄ってみよう。」

香霖堂へかうりんどう

Side A

愉快だった。笑いが止まらなかった。シロは、これの使い道を考える方にこそ苦心していた。

(……何せ、余るほどの金を手に入れたのだ)

シロは持っていた神器を懐に仕舞うと、ようやく、店員が持ってきた八つ目ウナギに口を付けた。

シロたちの向かった定食屋は、まだ昼前だというのに大層賑わっていた。さほど狭い訳ではないが、窮屈を感じる繁盛ぶりだ。数人の従業員が、あちらこちらと忙しく走り回っていた。聞けば、夜になると居酒屋に化けるそうで、あまり性質たぶの良さそうにない客も多数混じっていた。客の何人かは、もう酒が回っているようで、ときどき大きな声で愚痴が聞こえた。

不景気だ。金がない。コノヤロ俺の酒だ。仕事がない。女房が冷たい。明日から寺子屋だが子供が遊んばかりいる。ああ関節が痛い。女将さんは寝ているのか。昨日メイドさんから聞いたんだけど

音と音は混沌と混ざりあい、猥雑な調べを奏でていた。何でも店の主は妖怪らしい。妖怪が人間を雇って商売を繋いでいる。ならばこそその混沌だろうか。誰もが平等に醜悪で下劣。この地にもこのような場所があるのだと、シロは感慨深く思っていた。

なにしろ、シロにとっては、このくらいの方が落ち着くのだった。

「……呑気なものだな、シロ。まだ任務は終わっていない」クロが不機嫌そうに言った。

「金が手に入ったんだ。使わないでどうする」シロはそう言って嘯

く。

「土地勘もない。情報もない。慎重に動くに越したことはない」

「くくく。何だ。妬んでんのか？」

そしてシロは、自分の懐を叩いてみせた。隣の皮靴にも、これと同じものが入っている。金額の大きさを知っているクロは、一度咳払いをして、煙草に火を点けた。それをシロは、意地悪く眺めていた。

このシロが愉快になるまでには、また一悶着あった。

それは事件発覚の数時間前に遡る。シロは仕事を終わると、すぐに組織が指定した場所に盗品を持って行った。枯れた廃屋である。あまりに『いかにも』な場所に、シロはげんがりしていた。そうしている、交渉役の女がやって来た。若い赤髪の女で全身を黒で統一している。P nと名乗ったその女は、どこか人間離れして空気を持ち、それが人間で無いことはすぐに予測を付けた。

「へえ。やるじゃん、お兄さん。噂通りの腕前みたいだね」

女はクロによる報告と、シロの持つ神器の確認をすると、シロの仕事ぶりを大いに労った。口は生意気だが、若い女からの称賛にシロは上機嫌になり、そのまま品を渡そうとするが、しかし、ここで問題が起こった。なんと女は、神器を受取るうとしなかったのである。

組織の内部でゴタゴタが起きていると女は言った。今はとても受け取れる状況では無いらしい。すぐに収まるはずだから、しばらく預かっていてくれとの事だった。

契約の反故にシロは憤慨した。当然だった。だが、代わりに提示された冗談のような金額を見ると、途端に勢いが失せていった。見たことも無いような大金を見せられたのである。前金と合わせても相当な額になる。この時シロは、札束も重ねれば立つのだという事を初めて知った。

内約は、口止め料と不測の事態についての賠償がほとんどだった。

これで堪えてくれと女は言うが、いくら金銭を積まれても、自分たちが盗品を預かり続けることにはリスクがある。初めは頑として譲らなかつたシロだが、契約継続の証として次の仕事を斡旋されるとやがてシロの心は揺らいでいった。

シロは目の前の大金を見つめる。その後の決断は早かつた。

「……なかなか見込みのある女だったな。仕事はああでなくちゃいけない」

シロは弾んで言った。そこには最初に女にぶつけた憤りは無かつた。

「迷惑な話だよ。おかげで俺は、またお前のケツに着いて回らなきゃいけない」

クロは不機嫌に言った。わざと大きく煙を吐く。

「ククク。それがあんたの役目さ。宜しく頼むよ、検分役さん」

「仕事はきちつとやるさ」

クロはまた大きく煙を吐いた。心底ウンザリしているようだった。シロにとっては、そんなクロの態度すら愉快だった。

シロは手前の写真へ目を移した。

「こいつらが“次の仕事”か……」

机の上には二葉の写真が並べてあつた。交渉役の女Pnが寄越した写真である。どちらも一人の男を写したもので、一人は白髪まみれの老人、もう一人は恰幅のいい中年の男が写っていた。

「……殺し、か」

二本目の煙草を点けたクロは、唸るように呟いた。何をした、とシロが聞く。

「組織の金を使って武器を流していたらしい。そういう連中と繋がりがあるそうだ」

クロはゆっくりと話し始める。話の概要はこうだ。

彼らは組織の元構成員だった。以前、組織の内部で抗争が起こり、その混乱に乗じて、彼らは組織の金を持って逃走した。長い事追っ

ていたが、今になって彼らが反政府組織に肩入れしている事が分かった。

「片方は寺子屋の教師だそうだ」クロが不満げに言った。

「ハッ、ガキ相手に自爆の仕方でも教えているのか」シロが冗談めいた口調で言った。

「どうだかな。しかし、詰まん奴らだ。二年逃げ続けた。その結果がこれだ」クロは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「お陰で俺の懐が潤う。結構な話さ」

ふん、とクロが唸った。煙草を灰皿に押し付けた。

仕事の内容は簡単だった。

道筋は組織によって全て整えられていた。シロはただ、向かうべき場所に向かい、然るべき相手に引き金を引く、それだけでよかった。それが組織のやり方なのだ、と、クロは言った。自分たちは舞台を整えるだけで、ステージで踊るのはシロのような自由に動ける人間。故に組織の顔は表に出てこない。闇は闇のままにいられる。

しばらくして、無言で酒を呑んでいたクロが言った。

「……殺しの経験はあるのか？」クロは慎重な口調で言った。「本当にやれるのか」と。

「何を今さら。俺を誰だと思っている」

「大事なことだ。いざという時、経験の無い奴は動けない。それは俺にとっても不利益だ」

確かに経験はあるんだろうな、とクロは確認するように聞いた。

シロはその言葉を聞いて不機嫌になった。クロはシロに比べ、多少神経質なきらいがあった。シロにとっては、その堅実さが鬱陶しかった。

「下らない事を聞くんじゃないやねえ。そんな線はとっくに越えてるよ」

シロが半ば拗ねるように言った。顔を背けたシロにクロは大きく溜息を吐く。その態度こそ信用出来ないのだと思った。ますます面白くないシロは、手慰みに皿の上の料理を摘んでみた。食い荒らされ、脆くなった骨は、持ち上がる前にバラバラになって崩れ落ちた。

そしてそれは、人の倒れる様さまに似ていた。

「……行こうか。今夜の仕事まで隠れる所を見つけねーと」

シロは神器の入った袋を懐に仕舞うと、そのまま立ち上がった。杯の中には酒が残っている。クロは、やれやれと、自分の猪口を流し込んだ。そうして実に手慣れた動作で胸の十字を切る。まるで何か祈っているかの様だった。あまりにも自然だった為、ひよつとすると見落としてしまいそうだった。

シロは一瞬にして言葉を失った。

「なんだア、お前……」

シロは信じられないという口調で呟いた。まさか、であった。シロは、現状を上手く受け止められずにいた。

「俺はカトリックだ。……おかしいか？」

クロは、何でもないように澄ました顔だった。あまりに純粹で、憐れに思えてきた。

シロはついに笑いを堪えきれなくなった。

「くっ、……ハッハッハッ。何だよ、そりゃ。一体どんなジョークだい、クロ？」

シロが嘲るように言った。心底蔑んだ目でクロを見ている。対するクロは平然と返したものだ。対する

「お前は神を信じないのか？」

「信じないね。神などいない。神は貧乏人には何もしてくれねえ。本気で救いを求める奴に、神は無力だ」

シロは睨みつけるように言った。

シロはよく知っていた。シロがどんなに助けを求めたところで神は現れなかった。神は無力。それを知っているが故に、クロの姿が滑稽に映った。

「いいか、クロ。世界に神がいたとして、でも、そいつは人間なんか見ちゃいねえ。人の生きるも死ぬも興味は無えのさ。何故ならそれは、全部、人間の都合だからだ」

そこでシロはクロの方を見た。クロが眉根をひそめた。

「俺たちは盗むの殺すのでメシを喰ってる。愛すべき隣人を糧に潰して、テメエの愉快を引き延ばしている。他の奴らだって大した違いはねえ。どいつもこいつも、一皮剥けば善人面した悪人もだ。悪人が蔓延る悪人の世界。これは俺たちの都合だ。神の都合じゃねえ」

シロが大仰に言った。クロが口を挟む。

「……では、世界を創ったのは人間か？」

「違うな。もつとでかい奴だ」

ニヤリと口を歪めた。

「“欲”だよ。世界を創ったのは人間でも神でもない。でつけえ“欲”が地球を回してんのさ」

シロは吐き捨てるように言った。クロは無言で目を伏せる。さらにシロは言った。

「欲望の世界で役に立つのは“力”だ。他人を蹴落とし、欺き、より良い席を手に入れる為の力だ。力を持ってんのは神じゃねえ。紙カミ様サマの方だ。それが現実だよ」

そこまで言い切ると、シロはクロの言葉を待った。余裕の表情だった。どんな回答も冷笑で返すつもりだった。

「青いな、シロ。お前にもいずれ分かる」

クロはそれだけ言った。逃げられたようだった。

分かりたくもないさ、シロはそう言つと、勘定を任せて店を出ることにした。

暖簾を潜つて天を見上げると、空は今に降り出しそうな曇天だった。雨が降ったら面倒だなとシロは思った。

(……気に入らない。虫唾が走る)

それは嫌悪と言うより、憎悪に近い感情であった。

シロの隣を誰かが横切った。

「……？」

それは狐だった。

黄金色の束が、目の前を通り過ぎていく。その女は横目でシロを

一瞥すると、無言のまま店の中に入っていった。

(妖怪か……)

シロは、その程度の感想を抱くだけだった。

女とすれ違うようにして、クロが店から出てきた。窮屈そうに暖簾から身を出すと、不機嫌にシロを睨んだ。シロはやはり、冷やかに笑って返した。

その男、森近霖之助もりちか りんのすけが営む『香霖堂』は町の外れにあった。古びた品を扱う古道具屋で、古物で商いをしているのは、幻想郷ではここくらいなものだった。店は鬱蒼とした木々に囲まれ、それは町というより森に近く、店主の男も人というよりは物の化に近かった。

店主の霖之助は、半身が妖怪の半人半妖であった。

霊夢が香霖堂を訪ねるのは二回目の事だった。前に一度、魔理沙に連れられて寄った事がある。店主の変人ぶりにも驚いたものだが、それよりもこの店の在り様にこそ、霊夢は一考しなければならなかった。

香霖堂は、以前来た時と寸分違わぬ、独特の存在感を放っていた。まず、遠くから見ると店では無かった。ゴミ捨て場か、或いは不法投棄の跡と呼ぶのが相応だった。無造作に打ち捨てられた什器の数々がしばしば見る者を圧倒する。よく観察してみると、ブラウン管テレビや、フロンガス式の冷蔵庫など、ついに幻想入りを果してしまった家電の数々、さらに何処で拾ったのか旧ドイツ軍のエンジニア機まで流れ着いている。店そのものは古い訳でも無いが、周りのゴミ(店主は商品と呼んでいる)たちが、香霖堂そのものを不快な空間に仕立て上げていた。

昨今のお犬さまだって、もっとマシな生活をしている。 。
躊躇う霊夢を余所に、魔理沙は通い慣れているようで、軽快な足取りで入口　そこにあつたらしい　に向かつて歩いていった。ガラクタの山をかき分け扉を開くと、安っぽいベルの音が鳴り響いた。

「よう香霖。お得意さまが来てやったぜ」

魔理沙は声を掛けるが、そこに人影は無かった。薄暗く、静寂を保っている。魔理沙がもう一度催促するが、やはり変化は見られない。怪訝に思いながらしばらく待っていると、ガラクタの合間から

人の手首が現れた。一瞬背筋が凍る。招く方へ進むとそこに店主はいた。

「やあ、魔理沙。残念だったね。今日はもう閉店。僕はこう見えて忙しいんだよ」

「何を言っただ。たまには真面目に商売しな。私を見習ったらどうだい？」

「妙案だね。早く楽になれそうだ」

その男、霖之助は優男風の青年だった。体は細く髪は青白い。眼鏡の奥には、眠そうに開かれた青い目があった。前に見たときよりも顔色が悪いと霊夢は思った。

霖之助と魔理沙の他愛も無い応酬はその後も続いた。近くで見ていた霊夢は、兄妹みたいだと思っていた。

魔理沙が訪ねた。

「何か目新しいモンは流れてきたか？」

「最近駄目だね。何処も彼処も栓が詰まったみたい流れが悪い……ほら、あれをもらん。ニュートンの木だ。僕はね、あのリンゴが落ちるのをずっと待っているんだよ」

窓から僅かに見える庭を見た。確かに、一本の細木が伸びている。枝にはリンゴの実が生っていた。魔理沙は言わずにはおれなかった。

「……それは楽しいのか？」

「少なくとも、赤字の決算書の前で算盤を弾いているよりは楽しいね。で？ 本題は君の方だろ、霊夢。そんな所に突っ立ってないで入りなよ」

霖之助はようやく霊夢に向き直った。もしかして気付かれないのかもと思っていた霊夢は、ひとまず挨拶をしておくことにした。「こんにちわ、霖之助さん。ちょっと聞きたい事があって」

「……面倒事かい。長くなりそうだね。お茶を淹れてこよう。そこに椅子があるから使おうといい」

霖之助は、机の下から背もたれの無い椅子を取り出した。あまり快適そうではないと霊夢は思った。その椅子が、店内で唯一の客人

用であることは、霖之助しか知らなかった。

魔理沙はすかさず抗議を入れた。

「おいおいおいおい。私の時と随分態度違っのな。私にも椅子くれよ」

「無いよ。日頃の行いの結実だね。せいぜい慎ましく暮らしたまえ」
そう言っつて笑い、霖之助はお茶を入れる為に立ち上がった。偏見だ、偏見だと魔理沙が異を唱えていたが、霖之助は聞こえないフリをした。奥に引っ込んでしまっ前に霊夢が言った。

「あ・私、お茶よりミルクココアがいい」

途端に魔理沙と霖之助が凍りついた。この店にそこまでの期待を求める人間は、あまり居なかった。

「……何よ？」

「いや、何でも」

霖之助は、ココアは無いんだと断ると、二人分のコーヒーを持って現れた。甘い方が好きだと霊夢が言ったので砂糖は大目に入れてある。霊夢が受け取ると、もう片方は霖之助自身の口に運ばれた。

温かいコーヒーは魔理沙の手には渡らない。霊夢は事件の粗筋を霖之助に話した。

「……ふうん。それは災難だったね。確かに魔理沙の言う通り、余程の趣味人で無い限り、盗品はどこかに流す筈だ。神社の貴重品なんか盗んでも、金銭に変えなきゃ意味が無い」

「私にとつては“なんか”じゃないんだけど」

「おつと失礼。……でも、そうだね。止めた方が良い。この手の事件には首を突っ込まないのが賢明だ。素人が迂闊に手を出すべきじゃない」

霖之助は諭すように言った。霊夢は空になったカップに口を付ける。叱られているようで居心地が悪かった。

「君の話によると盗っ人は相当な腕利きらしいね。なら、最初からアタリを付けていたんだ。盗品の流せる場所を心得ていたんだよ。そういうマーケットが存在する事は確かに僕も知っているよ。表に

は出回らない、闇の商品を扱う市場があるという。売買されるのは貴金属に武器、奴隷、服用するとお花畑が見える薬など、一発で手が後ろに回るような品ばかりだ。高額での取引が行なわれていると聞く」

霖之助は散らかった机の上から新聞を取った。無造作にページをめくっていく。あるページで手を止めた。

「そして、そんな場所にはね、得てしてロクでもない奴らが関わっているものだ。　　ごらん、資産家の家で強盗殺人だ。財産の半分と使用人の命が奪われた。盗品はすぐに流れたよ。下手人の行方と一緒にね。これはそういう世界の話なんだ」

見ると、新聞の隅に事件のあらましが書かれてあった。あまりの生々しさに、霊夢はごくりとつばを飲んだ。

「火遊びは火傷のもとさ。火事は対岸で眺めるくらいが丁度いい」と霖之助は結論付けた。

「でも、あれはすごく大事なものの。何でだかは分からないけど、あれが無くなると大変な事になりそうで……」しかし、霊夢は消え入りそうな声で言った。霖之助は肩をすくめた。

「気持ちには分からないでも無いけどね。でもまあ、警察だって動いているんだろう？　なら……？」

そこまで言って、霖之助は急に言葉を切った。何かを思い出したようだった。

「いや、ちょっと待ってくれ。確か、まだ聞いて無かったね。霊夢、君は一体何を盗られたんだい……？」

それは　、と言おうとして、霊夢は言い淀んだ。朝に警官たちが言っていた言葉を思い出したのだ。

「えっと、その……」

「『他言無用でお願いします』かい？　……参ったな。まずいぞ、最悪だ。物凄くまずい」

霖之助の態度は明らかに急変した。口の中で何度も『最悪だ』を繰り返している。霊夢には、何の事だか分らなかった。

「あり得ない。くそつ、信じられない」

「何だ、香霖。何か知ってるのか？」

「いや、何も知らない。だが……。ああ、まずいぞ」

霖之助の様子は、ますます奇妙だった。彼は人前で取り乱すことなどまず無い。こんなに動揺した霖之助を見るのは、霊夢どころか、魔理沙でさえ初めてだった。

「霊夢」霖之助は言った。

「……何？」

「事件から手を引け。今すぐにだ。血を見ずには済まなくなる」

「おいおい、大げさだな。たかが泥棒退治じゃないか」

あまりに物々しい言い方に、つい魔理沙が口を挟んだ。しかし、霖之助はもう魔理沙を見ていなかった。

「霖之助さん。やっぱり何か知っているんでしょう？」

「知らないよ。知りたくもない。ただ知っているとすれば、身の引き方くらいなものだ」

そうして霖之助は、今度は頭を抱え込んでしまった。小声でぶつぶつと呟いている。何かを必至で考えている様だった。

霊夢に向き直ると、霖之助は淡々とした口調で言った。

「出ていってくれ。今日は本当に店仕舞いだ。僕はしばらく身を隠す事にする」

「……香霖。本気でヤバイのか？」

「少なくとも君たちが考えているよりはね。だから君たちも、もう終わりにするんだ。年長者の言う事は素直に聞いておくものだよ」

霖之助は断言した。そう言う霖之助の態度には、有無を言わせぬ迫力があつた。霊夢も、魔理沙でさえ、今の彼に反論出来るとは思えなかった。

ふと、魔理沙は気付いた。

「霊夢。その宝にはどんな価値があるんだ？」

「へ？」

「だから大事なものなんだろう？ 具体的にはどう大事なんだ？」

「……えっと、そういうのはよく分かんないんだけど……」

霊夢の言葉に、また霖之助の表情が変わった。霖之助は啞然としている様だった。

「……それは本気で言っているのかい？ 誰も君には伝えなかったのかい？」

霖之助は確認するように、慎重に言葉を繋げた。その姿はまるで馬鹿にしている様に見えて、霊夢は不機嫌に頬を膨らませた。

「もっつ、どうせ勉強不足ですよ。でも、物心付いた時には当たり前にあつたから、いまいち実感がわかないんだよね……」

「……何てことだ。訳が分からない。あの連中は一体何を考えているんだ？」

そう言っつて、霖之助はまた頭を抱え込んでしまった。

埒が明かない。そう思った霊夢は、霖之助に直接聞いてみる事にした。

「ねえ、霖之助さんは一体何を知っているの？ 何に怯えているの？ 教えて。これじゃあ、何が何だか分からない」

「……霊夢。確か、君の恩師は上白沢先生だったね。ここから先を知りたいなら彼女に聞くんだ。言っただろう？ 今日のもう店仕舞いなんだよ」

霖之助はもう終わりだとばかりに切り上げた。霖之助の答えに、霊夢は納得がいかなかった。しかし、霖之助はそれ以上何も語ってくれなかった。頑なとも思える霖之助の態度に、霊夢はもう何も言う事が出来なかった。

店の外に出ると雨が降り始めていた。轟々と強い雨だった。この雨の中、寺子屋に向くのは骨が折れる。慧音の元には明日行こう。二人はどちらともなく呟いた。霖之助の異変に戸惑っていた二人は、今すぐ何かしようという気は無くなっていた。

魔理沙が店の奥に傘を催促した。すると、間もなく二本の傘を持った霖之助が現れた。

自分のものを受け取ると、霊夢は一人で歩き出してしまった。何か思い込んでいる様だったので、霖之助の言葉の意味を考えているのだろう。

耳の後ろで声がした。

「魔理沙。もしもの時は君から言ってやれないか。君の言葉なら、彼女も思い止まってくれるだろう。最後は君が砦になっってくれ」

霖之助は内緒話をするような声量で魔理沙に伝えた。魔理沙は言っている事がよく分からなかった。

「何だそりゃ。買い被り過ぎだよ」

「……君しかないんだよ。彼女は、君が思っている以上に君を信頼している。依存と言っても良い。君は彼女のことを嫌いでは無いだろうか？」

霖之助は、冗談は許さないという顔で魔理沙に迫った。魔理沙は仕方なく、まあな、と曖昧に頷いた。

「それなら考えてみてくれ。どちらにしる、“決断の時”まであまり時間は無い」

そうして魔理沙も歩きだした。

魔理沙が霊夢に追いつくと、霊夢はまだ考え込んでいるようだった。傘と傘が擦れる。魔理沙は黙って霊夢の側を歩いた。二人はそのままずっと無言だった。

魔理沙は傘の合間から空を見た。雨は強くなったり弱くなったりを繰り返し、降り止む気配を見せない。いつもは箒で空を飛ぶ魔理沙は、これだから雨は嫌いだと思った。

博麗神社の石鳥居の前で、ようやく霊夢が顔を上げた。

「……魔理沙。やっぱり私は、あれを取り戻したい」

「そうか。じゃあ、明日は慧音のところに行くんだな」

「うん。魔理沙は付き合ってくれな？」

霊夢は懇願するような物言いだった。魔理沙は霊夢のこの顔が苦手だった。

「分ってるよ。どうせ乗りかかった船だ。満足するまで付き合っさ」
「約束してくれる？」

「ああ。約束だよ」

そうして魔理沙は霊夢と別れた。

魔理沙は中央街に向かつて歩いていった。この雨なら、宿屋で一泊した方が良いと思ったのだ。泥水を跳ねながら何とか宿屋に辿り着くと、宿屋は同じ様な考えの人間で溢れていた。部屋を取るのが大変そうだと魔理沙は思っていた。

宿屋の門口で、黒スーツと白髪の若者とすれ違った。若者は片手に麻の袋を提げている。魔理沙は、変な奴らだ、とだけ思った。

Side A

また、深夜だった。

乾いた発砲音が響き、辺りに火薬の匂いが立ち込めた。

男の体がぴくんと跳ねた。

何度か痙攣するように震えると、男はもう動かなくなった。

空いた胸の穴から、どくどくと血が溢れ、広がる赤は大地を浸食していった。シロは何の感想も無く、ただそれを見下ろしていた。

そうしてその男は絶命した。

「……遊び過ぎだ、シロ。危ないところだったぞ」

事後処理を終えたクロは、咎めるようにシロに言った。シロは近くにあった祠に腰かけ、無言で煙草をふかしていた。眼下では朝の霧が晴れて、ようやく町が目覚め始めている。天を拝むと、雲の切れ間に青が見えた。

「どこに捨てた？」向かいの山々を眺めていたシロが、さもどうでも良いように聞いた。

「暗く冷たい土の中だ。しばらくは孤独を友とする」クロは淡々と答えた。

「……酷えな。俺はお前ほどじゃないと思うぜ、クロ」

そうしてシロはけらけらと笑った。クロはまったくだと頷いた。

シロが最初に仕留めたのは、老人の方だった。

彼は、組織が指定した山奥の寺に、わざわざ自分から出向いてきた。おそらく、組織がそのように仕組んだのだろう。暗がりに入れ込むと、彼は話が違くと喚いた。

シロはその老人に向かつてまず一発撃った。彼は血を流して倒れた。まだ息があった彼は、地を這い何とか逃れようとしていた。シロは、そんな彼に続けて撃ち込んだ。音がして、喚いて、血が溢れた。三発撃つと、ついに彼は動かなくなった。

「……何も、あそこまでやらなくても良かったんだ。誰かが来たらどうするつもりだ」

「なあに、平和ボケしたこの住人にや、花火と銃声の違いも分かりやしねえ。それに、あのジジイだって自分がロクな死に方しねえことくらい予想していただろう」

そう言つてシロは、また大きく煙を吐いた。

殺された男は、組織から奪った武器を反妖組織に流す売人をしていた。男自身も過激派に属しており、浅からぬ因縁があつたのだろう。また、この場所では武器は貴重品だつた。流した武器で男は大金を稼いでいた。

……闇のルートで取引される武器が、誰に銃口を向けているのか。男は十分に熟知していた筈だつた。因果の鎖は男を逃がしはしなかつた。

「まア、まともな死に方をしないのは俺たちも同じだろうがな。……」

……さて、移動しようぜ、クロ。長居は毒だ」

シロが煙草の火を踏み消した。シロが立ち上がるとクロもそれに続く。二人は、そのまま町の方へと歩いて行つた。

シロの去つた後、煙草はまだ煙を吐き続けていた。誰も知るものはいない。ただ、祠にあつた狐の像だけが、煙の行方を見つめていた。

渡湖用の舟が行き交う港の近くには、洒落た風合いのコーヒーマシンがヨップがあつた。シロとクロは店の中に入っていく。初めての土地だというのに、シロはこういうものには目聡い。クロは半ば呆れ気味であつた。

開店は早く、すでに営業中の看板が掛けてあつた。中には店主と思わしき女がいるだけで、他に客はいなかった。クロは不機嫌を極めたが、シロはそこで一服済ませることにした。己がひと仕事を終えたばかりである事など、あまり頓着しない様だつた。店主に舟の

時間を聞くと、あと二、三時間はやって来ないとのことだった。

次のターゲットは、紅魔湖の向こうから船でやって来ることになっていた。シロたちはこれからターゲットの後を付け、所定の場所にて事を終えるよう指令が下っていた。殺害予定地に指定されたのは寺子屋の納屋。休日になると子供が消え、嘘のように静かになる。普段賑やかな分こつなると誰も近付かず、虚を突くには最適な場所だった。

クソ教師を殺すのにも最適な場所だ、シロはそう嘯うそいていた。

コーヒーシヨップを後にすると、シロは波止場に座り、仕事道具の手入れをしていた。かちやかちやと軽快な動作で愛銃を解体していく。拾った新聞紙で簡単に汚れを拭き取ると、一つ一つのパーツの歪みを確認していった。全てが終わると、何度か抜き打ちの練習をし、また腰のホルスターに仕舞った。その間、ものの数分ほどだった。

「手慣れたものだな」クロが言った。

「何が」シロが聞き返す。

「仕事だよ。何の躊躇いもない。笑いながら人が撃てるのは、何人も殺してきた証だ」

「最初に言っただぜ？ そんな線はとつくに越えている」

「……そうだったな」

クロが向こう岸の船着き場を眺めた。ターゲットが利用する筈の発着場だった。積み荷を降ろす舟の横に渡し舟もあった。その舟はここからよく見え、また向こうからシロたちのこともよく見えた。場所を変えた方がいいとクロは思った。

「初めて人を撃つたのは？」歩きながらクロは聞いた。

「関係ねえ」シロがクロの後ろで言った。

「言いたくないならいい」

「そんなんじゃねえよ」

「いいさ」

しばらく歩くと倉庫があった。それは古く、手入れもされていない

いようで、少なくとも数年は使われていないと思われた。もう一度向こう側を見ると、舟の姿を確認できた。倉庫の影に立ち、二人はここで待つことにした。

シロがクロに言った。

「……七歳の時だ。その時初めて人を殺した」

シロは、しゃがみ込んで退屈そうに空を眺めていた。クロは、そうか、と言った。

「思えば、それで俺の人生は決まったのかも知れねえ」

シロが自嘲気味に呟いた。それがシロにとっての決断の時だった。シロが初めて人を撃つたのは、己の手足が伸びきるよりも前だった。撃つた瞬間の事は覚えていない。ただ両の手が熱く、火傷してしまいそうだと思っていた。

親だった。生みの親か育ての親かは分からない。ただのモノになつてしまったそれを、シロはぼんやり眺めていた。何かを考えていたような気もするが、今となっては何も思い出せなかった。ただ、その時シロは、この世界で生き残る為に、『倫理』などというもの、何の役にも立たないのだと知った。

「……怖くはなかったのか」クロが聞いた。

「さあな。どうにもならないこともあるさ」シロはさもどうでもいいように言った。

それからシロは、さまざまな相手の元についていった。殺し屋、解体屋、ドラッグー。ろくでなしの人でなしの間を行ったり来たり。そうして世の悪という悪を経験した。シロたちの居る場所では、そんな輩が掃いて捨てるほどいた。シロはその中で生き、殺し、また、自分もその“ろくでなしの人でなし”の仲間入りを果たした。

「そんな生活をしているとな、人の命つてのが、実はどうでも良いものなんだって事が見えてくる。何の意味もない、ただ“在る”っただけのモノ。そういうのが分ってくるんだ。そうなりや、もう迷わない、躊躇わない。笑いながら引き金引けるようになる」

クロは黙ってシロの話を聞いていた。クロは、あの老人を撃つた

シロの顔が忘れられない。あれは盗っ人でも殺し屋でもない。狂人の顔だった。

「結局な、生きるも死ぬも、全ては無意味なのさ。生命に意味なんて無えんだよ。『ただ生きることは素晴らしい』ってな、そんなもんは勘違いでしか無い。何故なら“死”ってのは、初めから約束されてる事だからだ。死ぬために生まれ、死ぬ為に生きる。何の意味がある？ 妄想だ。ただの幻想だよ」

人が生まれ、生きて、そして死ぬ。誰も逆らえない絶対的な真実。そこに善意は無いし、まして悪意などある筈も無かった。しかし、それでも人は『生』に意味を見出そうとする。シロにはそれが滑稽だった。

「生きた過去も、これからの未来も、いくらだって否定できるんだ。お前に過去があつたかなんて誰にも証明できないし、お前に未来があるかなんて誰にも保証できない。俺たちは今をきているだけだし、今はこの一瞬だけでしかない。唯一“今”のみが確実に絶対的なんだ。“今”が愉快かどうかが重要で、それ以外は些細な問題なんだ」

「……ならば、今の愉快のためには、誰かの愉快は関係ないのか」
クロは低い声で、ともすれば挑戦的なニュアンスでシロに問いかけた。シロは相変わらず余裕の表情を浮かべている。

「関係無いね。何故なら、その誰かもまた、“別の誰かの愉快”を踏みにじって暮らしているからだ。ぐるぐる、ぐるぐる、な。そうして人は生きてんだ。その流転の中でしか生きられないんだよ」

「……だが、神の前では人は平等だ。誰もが平等に死ぬ権利を持ち、誰もが平等に生きる権利を持つ」

クロが食い下がって反論した。シロは、またかと思った。

「天は人の上に人を作らず人の下に人をつくらず、だっただけか？」

「少し違う。だが、まあそんなところだ」

「ふん。まあ、そりゃあ正しいだろうよ。人類皆平等。みんながみ

んなブラザーで、俺たちや地球の大家族ってか。違くない。みんな大好き紙様カミサマが言うんだ。間違いねえよ。……だがな、クロ。忘れてないか。人の下には“人じゃ無え奴”がいるんだぜ？」

シロは嘲りとも取れる笑みを浮かべた。クロは黙ってシロを見ていた。

「俺もお前もただ飼いだ。家畜に神はいねえ。犬に神さんは微笑まねえ。夢見ンのは止めときな」

シロは断罪するかのようにクロに言った。クロは、そうかもなと返した。やる気の無い返事にシロは顔をしかめた。何に対して突っ掛っているのか、自分でもよく分からなくなっていた。

クロが港の方へ目を遣った。見ると例の船はすでに到着しているようだった。どうやら長い間話し込んでいたらしい。クロは慌ててターゲットの顔を探す。すると、舟から降りてくる何人かの中にその顔を見つけた。クロはよく確認する為に舟の近くまで歩いて行く。シロがその後ろ姿を眺めていた。

ふん、下らねえ。

そう呟くと、シロは忌々しげに立ち上がった。なぜだか無性に腹が立った。

倉庫の角を曲がると、シロは一人の女とぶつかった。予期せぬシロの出現で、女はバランスを崩して倒れてしまった。シロは面倒くせえなと思った。

「悪いな」

シロはぶつきらぼうに言った。女はシロの差し出した手を取らず、自力で立ち上がった。

「いえ、大丈夫です」

その女と目があつた。若い女だった。銀の髪、端正な顔立ち、そして油断のない鋭い眼。シロは、一見して同業者かと思ふ。だがその女は、シロたちに無い、ある種の余裕のようなものを纏っていた。

「これ、あなたのものではないですか」

シロが茫然としていると、女は何かを差しだした。シロは慌てて自分の懐を探す。女が差しだしたものの、それは盗んだ神器だった。

「あ？ ああ、すまねえ」

務めて何ともない風を装ったつもりだった。女の視線がいちいち突き刺さる、 ような錯覚を覚えた。

「いいえ。それでは、私は先を急ぎますので。御機嫌よう」

そうして女は去っていった。あっさりしすぎなくらい、あっさりした別れだった。後に残されたシロは女の後ろ姿を眺めていた。

堅気の者じゃない。そんな気がしてならなかった。

「現場ではあまり人と話すな。顔を覚えられると面倒だぞ」

クロだった。シロは一瞬で気が抜けたように思った。また、いつもと変わらない減らず口を利いた。

「構わねえさ。あと一人が終われば、この町ともおさらばだ」

そうしてシロたちは写真の男の尾行を始めた。

だが、シロの頭の中から、あの銀髪の女の目が中々離れてくれなかった。

いるのか。世俗が変人を拒んでいるのか」

「変人、変人を語る」

「失礼な奴だな。私は普通の魔法使いだぜ？」

「変人ほどそう言うわ。変を変とも思わないから変人と呼ぶの」

楽園の普通な巫女さんは、きっぱりとそう言った。

迂遠な小道を抜けると、ふいに視界が広がった。野原の松の林の陰に、小さな茅葺き小屋が見えてくる。慧音はその小屋にいた。

「お邪魔ー。慧音いるー？」

霊夢はノックもせず暗がりにも声をかけた。覗きこむと、中は寒いくらい静かだった。山姥でもいるんじゃないか。魔理沙はそう思った。

霊夢の呼びかけから十もせず慧音は現れた。

「はい。どちら様でしょう……？」

現れた慧音は浴衣だった。淡い藤色。上から紺の羽織りをかけている。片手に鎌を持ち、また、もう一方のざるには明らかに庭に生えていたのであろう雑草が盛っていた。紛うことなき山姥であった。「今は忙しいんだが……」二人の姿を確認した慧音は露骨に嫌な顔をした。

「随分な挨拶だな。遠路はるばる訪ねてきたのに。何でこんな辺りなとこに家を構えたのか、霊夢と討論していたところだ」魔理沙は先程の会話を思い出して言った。

「余計なお世話だ。べつに“普通”だろう？」

それを聞いた魔理沙は、皮肉な笑みを浮かべて振り返った。

「……霊夢。さっきの言葉もう一度言ってみるか？」

「いいのよ。役に立つ変人だから」

「なんの話だ」

そして二人は家の中に上がり込んだ。

「狭ーっ。私んところより狭い」

霊夢は声を大にして言った。通された部屋は霊夢の言う通り小さな部屋だった。もとより部屋らしき部屋は一つしかない。あとは土

間があるのみだった。

実に簡素で質素。それは上白沢慧音という人物の性格を十二分に表していた。

「立って半畳寝て一畳だ。どうせ独り者さ、これで十分なんだよ」

「本は？」

「あれだけは寺子屋に置かせて貰っている。持ち主よりいい生活をしているよ」

「へえ」

慧音は霊夢たちを部屋の隅に座らせると、何か淹れてこようと立ち上がった。何が良いかと聞くと、霊夢がすぐさま応えた。

「私、ミルクココアがいい」

「……」

慧音は少し間をおいた。そういえばこんな娘だったと思い出していた。横の魔理沙は、口元を覆ってくすくすと笑っていた。

「すまん、霊夢。うちには無いんだ」

「えー？」

そして、二人分のコーヒーと自分には緑茶を持って、慧音が戻って来た。今度は魔理沙の手にもすっかり渡る。霊夢はそれを受け取り、苦いと言った。魔理沙は慣れない座布団の座り心地に落ち付かないでいた。

霊夢と魔理沙の前に慧音が座った。

「で？ 何があつた。説教されに来た訳じゃ無いんだらう？」慧音はさっそく本題に入った。

「そりゃあ勘弁だな、足が錆びちまう。 霊夢のところで事件があった。盗難だ。私たちは犯人を追っている。知っている事があれば聞きたい」

「……言ってみろ」

「うん。盗まれたのはの宝物殿の神器なんだけど」

霊夢は事のあらましを慧音に伝えた。

慧音は無言で話を聞いた。事件の発覚から警察の対応。相当な手練

の犯行であるとの事。犯人の手がかりは掴めていない事。そして昨日の霖之助の話。説明が進むにつれ、慧音の表情が険しくなっていた。

どこかで見た事がある と、霊夢は思った。それもそのはず、慧音の顔は昨日の霖之助の顔と全く同じだった。

「それは、本当なのか……？」

すべてを聞き終わった慧音がこぼした。

「うん。嘔吐く必要、ない」

「……参ったな。何故だ？ あり得ない。あり得るはずが無いのに……」

慧音は髪をかき上げた。あり得ないを繰り返す。その動作一つ一つが、あの時の霖之助の行動に酷似していた。

またか 。 霊夢はそう思った。

「霊夢。お前は盗まれた宝についてどのくらい知っている？」慧音が聞いた。

「はつきり言つて何も。だって誰も教えてくれなかったから……」

「それでも取り戻したいと思うんだな。なるほど。うまく出来ている。お前は正しいよ」

慧音はまた意味深に頷いた。どういう意味かと霊夢が問うた。

「待っている」と霊夢に言つと、慧音はまた席を空けた。裏手の倉庫から、今度は数冊の本を持ってきた。その中の特に分厚い本を開く。中身は相当古いようだった。

慧音は軽やかな手付きでページをめくり、やがてある所で手を止めた。そういえば、昨日もこんなシーンがあつたなと、魔理沙は思い出していた。

「私には、お前の両親や八雲紫が、何を思つてそれを伝えなかったかは知らない。大きな理由があるのかもしれないし、無いのかもしれない。どちらにしろ、私が聞かせてやれるのは、あくまで私の理解の程度だ」

そう言つて前置きをすると、慧音は神器と博麗家との関係性を語

りはじめた。

「まず神器の説明からだな。霊夢、あの中には何が入っていた？」

「え？ 私、中は一度も見た事が無いんだけど……」

慧音の問いに霊夢が素っ頓狂な声を上げた。魔理沙はいよいよ呆れていた。

「おいおい。中身も見たこともないのかよ。それじゃあ探しようがないだろうが」

「だって……。でも、見ちゃいけないって……」

霊夢は情けない声を出す。慧音が助け船を出した。

「まあ、そんなことだろうと思っていたよ。でなければ私のところに来る必要がないからな。よく聞け霊夢。あれはな、単なる財宝の類じゃあない」

慧音がそこで言葉を区切った。霊夢は息を吞んで続きを待った。

「博麗に奉納されし神宝。それは、太陰太極『陰陽玉』だ。どの角度から見ても陰陽を示す不思議な玉だと聞く。この国の成立と同時に龍神から授かったとも言われているよ」

……陰陽玉。霊夢は心の内でそう反芻した。それならば霊夢は知っていた。『段幕ごっこ』にレプリカを使っている。それが、こんなに身近にそれはあったのだ。

「陰陽はこの国の歴史なんだ。白と黒と。陰と陽と。対極のようで同質で、同質のようで混沌。混ざり合うように、融け合うように、しかし決して相容れることは無い。人と妖と、まるでこの国の形そのものだ。幻想郷という国家を象徴しているものなんだ」

「えっと……。つまりどういうこと？」話が難しくなりそうなので慌てて霊夢が言った。

「あれがなくなれば、博麗神社は消滅するぞ」

そして、慧音はとんでもない事実を突きつけた。

「……嘘」

霊夢は驚き過ぎてそれ以上の言葉が出なかった。ぽかんと口を開けて両目を見開いていた。そんな霊夢に、慧音はさらに詳細を告げ

た。

博麗神社では、代々後継者に神器を受け渡し、その儀式に依つてのみ継承が正当なものとされていた。それは時に血縁よりも重視され、神器に選ばれる素養があるかこそが、継承の絶対条件だったのだ。継承の儀式は今の代まで途切れることなく続けられ、今回の事件はまさに例外中の例外と言えた。

そこまで聞いて思い出したように霊夢が言った。

「えっ？ 待つて。それじゃあ私は……」

「その通り。儀式を済ませてないお前は、正式な後継者とは呼べない。お前はまだ“巫女さん”だろう？ あくまでサポート要員だ。今も神主“代理”として儀式を執り行っているはずだ」

…… 霊夢は正式な儀式を一人で行ったことは無かった。

「おいおい、どういうことだ。つまり、神器が見つからなきゃ、霊夢の代で継承が途絶えちまうってことか」

「その通りだ。だから私も道具屋も慌てている。下手をすると取り返しのつかない事になる」

霊夢がこくりと頷いた。霊夢は霊夢なりに、事の深刻さを理解している様だった。

事件は博麗神社にとっての大事である、やはり霊夢の勘は正しかったのだ。

しかし……、と魔理沙は思う。魔理沙は神社の関係者では無かった。だから魔理沙には、どうにも納得できない事があった。

「そこが分かんないんだよな。こーりんはずいぶん物騒な事を言ってたぜ？ 何で霊夢の継承とドンパチが関係するんだ。ただ神社が潰れるだけだろう？」

魔理沙は疑問をそのまま口にした。『神社が潰れるだけ』の言葉を聞いて、霊夢が床を叩いて抗議している。それには見向きもせず、魔理沙は慧音の眼に注意を寄せていた。

「魔理沙。幻想郷において“博麗”の名は重大な意味を持っている。一見平和な幻想郷が、実はそうではないことを、魔理沙は知っている。

るはずだ」

魔理沙は一瞬考える。どこかの似非魔術師が頭を過る。何となく思い当たる様だった。

「過去に大きな戦争があった。これは知っているな。結界成立時だ」
慧音は霊夢に向かって切り出した。

「うん。何となくは……」霊夢はぎこちなく答えた。

「寺子屋で教えたはずなんだが……。まあいい。とにかく大きな戦争があったそうだ。結界の建立を目指す妖怪連中と、それを認めない人間との間に起こった戦争らしい。妖怪は自分の身を守る困いが欲しかったし、人間は時代に置いて行かれることに危機感を抱いた。違^{たが}う意見は衝突し、この地に多くの血が流された」

過去に大きな戦いがあった。大人たちは口を揃えてそう言った。多くの血が流され、今の平和は過去の努力の賜物なのだと言う。

だが霊夢は、昔からそれを信じられずにいた。今があまりに居心地が良くて、戦争の時代があったなど想像が出来ないのだ。どこか余所の国の話に聞こえ、また今現在も、慧音の話をどこか遠くの話にしか捉えられなかった。

慧音はさらに話を続けた。

「その戦いを終わらせたのが博麗だそうだ。双方を和解させ、博麗大結界を引く事に成功した。……どうやって争いを止めたかは分らんよ。そもそも大戦争が本当にあったのかどうかも怪しい。当時の資料はあまりに少ない。だが、現状、そういうことになっている。なっている以上は、事実として受け止めねばならない」

事実が歴史を創るのではなく歴史が事実を創るのだ、慧音はそう続けた。

「だから、もう分るだろう？ 博麗の名は“楔^{くさび}”なんだよ。今の平和は、いがみ合っている両者が、互いに博麗の顔を立てることで成り立っている。楔を失い、タガが外れてしまえば、人妖は再び衝突するぞ」

戦争がしたくて堪らない者たちは両サイドの存在する。いくら法

を整え国家の体を成したとしても、それが現実だった。人妖のいがみ合いは未だ尾を引き、衝突は日常茶飯事だ。憎悪の化け物を胸の内で飼いつける者は確実にいるのだ。そんな彼らが事件の事を知れば、互いに罪をなすりつけ合うだろう。そしてそれは、両者の全面衝突の切っ掛けになり得る。

そこまで聞いて魔理沙は思った。

「なら、おかしくないか？ そんな大事なモンなら、何でもっと嚴重に管理していないんだ。あんな神社じゃなくて、もっとちゃんとした場所に保管すればいいのに……」

魔理沙は抱いた疑問を慧音に投げた。

「あそこが一番“ちゃんとした場所”なんだよ。初めに言ったな、神器を盗み出すなんて出来るわけが無いと。森近もそう言っていたはずだ。そんな事できるはずが無かつたんだ」慧音はきっぱりと断言した。

「どうして？」と魔理沙が重ねて尋ねた。すっかりついていけなくなった霊夢も、困惑の顔を慧音に投げた。

慧音は少し間をおいて語りはじめた。

「宝物殿には結界が引かれている。ただの結界じゃ無い。確率結界だ。 $1/1000000$ （百万分の一）。これが中に入れる確率だ」

慧音はとんでもない数字を口にした。

「百万回で一度の成功率だ。何度挑戦しようが扉の錠が落ちるのは $1/1000000$ 。数字は人間も妖怪も関係ない。私にも、魔理沙にも、霊夢や八雲にも、そこらの子猫にだって同じ数字だ。誰もが平等に $1/1000000$ 。ゆえに強固で覆し難い」

例えば宝くじは必ず当たりが出るが、それは決まって『どこかの誰か』の話だ。身の周りでは見かけないし、まして自分が当事者になることなど夢のまた夢である。宝物殿が開くのはそのレベルの確率なのだ。

それは実質ゼロと見て差し支えない数字だった。限りなくゼロで

はあるが、しかし、建前上の確率を残すことで、結界の精度を上げている。絶対的で圧倒的な壁。999999の拒絶。

不可能だ。魔理沙はそう思った。

「でも、私は普通に入ってたよ。毎日毎日。それは私が特別だから？」

「ある意味そう言える。だが結界はお前を差別しない。毎回1/1000000を引くお前の“勘”が異常なんだ」

「……そんな」

霊夢は幼いころから宝物殿の管理を担当していて、霊夢は日々の管理を欠かさなかった。毎日毎日綺麗に清掃し、あるいは日常の一部と化していた。

それが、1/1000000？

とても信じられなかった。

「何で。何で私だけ……？」

「あるいはゼロの数と関係があるのかも知れないな」

「え？」

「いや、何でもない。ただの洒落だよ」

慧音の話はそれからも続いた。

……霊夢は、もう口を挟まなくなっていた。一度に知らされた情報に溺れかけていたのだ。明らかに情報過多で、混乱は極地に達していた。

激しい頭痛と目眩がする。

慧音の話を聞く魔理沙の傍らで、しかし霊夢は孤独を感じていた。

ふいに柱時計が鳴った。見ると、針は十二時を差していた。

「おっと、しまった。今日は寺子屋に行かなければならないんだ。

悪いが続きは今度にしてくれ」

「今日は休みじゃ無かったの？」

「急遽、午後から授業をやることになったんだ。今年は雪が酷かっただろう？ 授業が遅れているんだよ」

慧音はそれで話を断つと、浴衣から普段着へ着替えた。白と青で

構成された、一昔前の女学生のような格好。頭には四角の帽子を被り、あご紐で止めている。霊夢は子供のころから変な格好だと思っていた。

「魔理沙は分別があるだろうから心配はしていないが、あまり無茶はするなよ。警察が捜査をしているなら、全部任せてしまえば良い。自分が動く必要は無いんだ」慧音は出口を潜る前にそう投げかけた。「わかっているよ」と魔理沙が言う。霊夢は俯いたまま何も答えなかった。

慧音はやれやれと溜息を吐いた。

「とにかく気を付けるんだ。連中は時に順序つてものをすっ飛ばす。一番大事なものは何なのか、今の内によく考えておくんだ」

慧音はそう残すと、今度こそ家を後にしてしまった。薄暗い部屋の中に霊夢と魔理沙が残される。

霊夢があまりに動かないので、魔理沙は霊夢の持っていたカップを奪った。冷えたコーヒを一口すすると、それはとても甘かった。

side]

白状しよう。

私ははじめ怒っていた。

こんなものは私の知る世界ではない。

こんな世界を私は認めない。

あまりに異質で。

あまりに違っていて。

私にそれを受け入れることは困難だった。

しかし、私は知っている。

拒絶はやがて憎悪となり、

憎悪は狂気を伴った攻撃性へと転ずることを。

排除の快楽は正義の美学へと転化され、

澱んだ空気に溺れた群衆は、

数の暴力によって過ちを繰り返してきたことを。

どこでだってそうだった。

東の海でも西の海でも。

過ぎた過去でも、やってくる現在でも。

秩序を維持する為に異端の排除は已むを得ず、

どんなコミュニティでもそれは実施される。

全てを受け入れる幻想郷は、

それを作る者たちによって拒絶の壁を構築したのだ。

だが私はアクセスを試みる。

この世界を知りたいから。
もつともつと知りたいから。
私の知らない境界の向こうへ
私は恐る恐る手を伸ばす。
或いはそれは、少し憧れに似ていた。

そして私たちは反転する。

「で、まだ諦めないのか」

後ろを歩く魔理沙が言った。

「当たり前よ。絶対見つけてやるんだから！」

しかし、前を歩く霊夢はがなるように返した。その繰り返しだった。

慧音の家を出てからというものの、霊夢はずっとこの調子だった。今まで以上にいきり立って捜索を続けている。おそらく、今頃になつて事態を理解し、そして腹を立てているのだろう。慧音の話は逆効果だったなと魔理沙は思った。

「なあ、お前、疲れてんじゃないのか」魔理沙は言った。

「疲れてない」霊夢は慥然として答える。

「ホントに？」

「疲れてない！」

……取りつく島も無い。魔理沙は諦め心地に肩をすくめた。

しばらく歩いていると、小さなコーヒーショップがみえた。背の高い銀髪の女が入っていくのを目聡く見つける。その姿に魔理沙は覚えがあった。

「……？ あれって吸血鬼ンとこの婦長サマじゃないか？」

霊夢が魔理沙の指す方を見た。見覚えのある銀髪。確かにその女は、紅魔館で働く十六夜咲夜に違いなかった。いつものメイド服ではなく、黒のタートルネックとジーンズを着用し、いかにも休暇然としている。

「そうだ、紅魔館なら何か知っているかも……」

レミリアなら幻想郷の流通にも詳しい。霊夢の提案に魔理沙も頷き、そうして二人は咲夜に続いた。

扉を開けると、可愛らしいドアベルが鳴った。

「こ、こんにちわぁ……」

なぜか自信無さげな声で霊夢が言った。普段の尊大な態度はなりを潜めている。霊夢は初めての場所では大抵こうなるのだ。あるいは自分の場違いの格好に気後れしているのかもしれない。

魔理沙が奥のカウンターを見た。細身の人のよさそな女性が立っている。咲夜がその前の席を陣取っていた。店主が霊夢たちに気付いた。

「はいな。初めてはんですか？」

馴染みのない発音だった。声に反応した咲夜は、背後の霊夢たちに気付き、思い切り嫌そうな顔をした。

「げ、白いのに黒いの。何でアンタ達ここに」

「犬みたいなの呼び方すんな。咲夜が入ってくるのをみて寄ってみたんだ」

「ああ、私の逃避空間ザ・ワールドが……」咲夜は頭を抱えて嘆いた。「この子ら知り合い？」と店主に聞かれ、咲夜は黙って頷いた。

主人はニコニコしながら霊夢と魔理沙を見比べた。ぺこりとお辞儀をした。

「ウチ、イズミいます。よろしゅう。何や飲まれます？」

店主の問いに、魔理沙は慧音のところへ飲んだからいいと断った。しかし、注文するのが礼儀だと咲夜に咎められ、仕方なくコーヒ―を注文した。霊夢は熱心にメニュー表を眺めていたが、やがて嬉しそうに言った。

「私、ミルクココアがいい」

「……」

またかと、魔理沙は白けた表情で友を見た。ニコニコしていた。仕方が無いので店主の方を見た。店主もニコニコしていた。

「そやね。甘い方がエエもんね。今作るさかい。ちよっと待ってえいな」

店主はそう言うと、とてとてと厨房に引込んだ。

残された咲夜をみた。咲夜は霊夢たちからひとつ隣の席に移動していた。明らかに避けている。ならばと、追いかけるように霊夢が

席を移動した。昨夜が立ち上がってまた別の席に座る。それを霊夢が追跡した。この不毛な行程を三回繰り返すと、ようやく咲夜は諦めた。

霊夢たちは事件の概要を咲夜に話した。

「……うーん。私に言われても分かんないなあ。そもそも私はお嬢様の仕事にはノータッチだし」

しかし、咲夜は困った顔をするだけだった。事件のことは知らないと言う。咲夜はあくまで紅魔館のお手伝いさんに過ぎない。それ以上でも以下でも無く、主の事業の事となると専門外だった。手がかりがない事が分ると、霊夢は残念そうに下を向いた。

「てゆーか、盗まれたのって何よ？ モノが分かんないと探しようも無いんじゃない？」

今度は咲夜が霊夢に疑問を投げた。素朴な疑問である。しかし、霊夢は何も答えなかった。ばつが悪そうに頬を膨らませる。要領を得ない霊夢の代わりに、魔理沙の方が雄弁に語った。

「それがな咲夜。霊夢ときたら自分のモンなのに何も分かってなかったんだよ。聞けばどんな形かも知らねーって言うんだ。おかしいだろ？」

「……あんだ。それでどうやって探すつもりだったのよ。それじゃあ犯人とすれ違っても気付かないじゃない」

咲夜と魔理沙のタッグは容赦なく霊夢を糾弾する。言われ放題だった霊夢は、さすがに耐えきれず反論した。

「何よ、何よ。教わらなかつたんだから仕方ないでしょ！」

ずるいよ、教えてくれないなんて。私のことなのに内緒にして……。霊夢は拗ねた子供のようになんて。私のことなのに内緒にして……

霊夢は仲間外れにされた気分だった。自分がずっと守ってきた場所なのに、その本人が一番ものを知らないのだ。今まで自分は何をやって来たのだろうか。何も知らず、何も知らされず。自分はあの神社で何をしてたのだろうか。

やがて、テーブルにカップが並べられた。話を聞いていた店主は、

ニコニコしながら言った。

「神器ゆうんはね、見いーひんモンよ。見たらアカンの。中を開けて見てしもうたら神性が無うなつてまう。ただの“モノ”になつてしまっんね」

店主の言葉に霊夢はこくりと頷いた。霊夢も、今までそう言われてきたのだった。

「わっかんないな。それじゃあ、もうモノ自体は朽ちてるかも知れねーだろ。何でそんなもんを有り難がつたりするかな」

「それが信仰なんよ。なんも無いトコロに神サマ見るんがこの子の信仰。それを笑うたらアカンよ」

「別に笑わないけどさ……」

それでこの話は一端終わった。魔理沙は出されたコーヒーを飲んだ。さすがに美味かった。霊夢もようやく飲めたミルクココアに舌鼓を打っていた。こんなに美味しいココアは今まで飲んだことがないと言う。店主に気に入られた霊夢は、その後、彼女のおもちやになつていた。ウチのこと覚えとるー？ と頬を引っ張って遊んでいた。霊夢は知らないように言った。店主は夏祭りで霊夢を見知っていた。

「魔理沙は神社によく行つてくせに、そういう所疎いよね」咲夜が言った。

「信仰か？ まあな。生憎そついうものは信じてねーし。咲夜はどうだ？」

「信仰事体は否定しないよ。私にも神がいるし。ただ、それ以外を神とは認めない。だから神社の前で手を合わせたりはしない。敬う義理がないからね」

それは魔理沙にとつて意外な答えだった。

「何だ何だ。まさかお嬢様ちひつ子のことを言ってるんじゃねーだろうな」

魔理沙がそう揶揄すると、咲夜はじやりとネックレスを見せた。先に付いているのは銀のロザリオだった。

「げ！ 最悪だこいつ！ 反乱だ。革命を起こす気だ！」

「ばーか。最初から改宗はしませんって条件付きで雇われてんだから。お嬢様のお墨付きよ」

信じられねー、と魔理沙はまだ納得していなかった。それとは別に、ロザリオに興味を示した霊夢は、見せて見せると咲夜の手から引ったくった。透かしてみたり転がしてみたりしながら綺麗と言っていた。店主の手に渡ると、飲み込むまねをして咲夜から拳骨を食らわされていた。

それを見ていて魔理沙は思った。

「霊夢のとこって、そーゆーの適当だよな」

魔理沙が言った。何のことだか分らない霊夢は困った顔をした。

「ロザリオだよ。お前んとことは宗派違うんだろ？」

「ああ、そういうこと。うーん、あんまり気にならないなあ……？」

霊夢ははたと首を傾げた。「同じ神様には違いないし」と。

そして、それが霊夢の普通だったのだ。

霊夢にとつては、それがどんな神様なのかは興味の対象ではなかった。どんな神であれ神は神。人があり、自然があり、そして神がある。それが当然と思って育った霊夢は、誰がどんな神を信じるかは、あまり意味のないことに思えた。

「何というか、万物に神を見るっていうか。私はね、自分は生かされてるって思ってるの。私がこうして生きていられるのは、私じゃない誰か大勢のお陰だと思う。私は一人じゃ何も出来ないし。だから　そう、器、かな。自然とか神様とか、そういう器。自分を受け入れてくれる大切な器。信仰って、その器に心を注いでいく様なものだと思う」

霊夢はそう言った。器なら色んなものがあっても仕方ないよ、と横で聴いていた咲夜はそつとロザリオを抱く。信ずる道は違えど、咲夜にもその言葉はよく理解できた。

霊夢にとつて神とはまさしく自然であり、己はその神によって生かされているのだった。人でもモノでも現象でも、そこに神を見さえすれば、それは神になる。その全てが己の営みを支えているのだ

と考えるのが霊夢の信仰だった。

霊夢自身、自分に特別な才があるとは思えなかった。また、誰かの役に立っているなどとは考えられもなかった。そんな自分を神は許して、生を認めてくれているのであれば、信仰に心を奉げることは、霊夢にとって当然だった。

……しかし、魔理沙には、霊夢の言っていることがよく分からなかった。もちろん理屈は理解できるし、そのアニミズム的な思想も分らないでは無い。だが、その信仰を納得するのは容易なことではなかった。なぜなら、魔理沙はいつも自分で選んできたのだ。自分で生きる道を決め、自分の力でここまで進んできた。今、自分がここにいられるのは、全部自分の実力だ。そう思っていた。だから、誰かに生かされているという感覚は、魔理沙にとって認め難いものだった。

(でも、それでも私はこうして霊夢の側にいるのだ……)

しばらく咲夜たちと会話をして、霊夢たちは店を後にすることにした。

帰り際に主人が言った。

「そや。今朝、ウチにキツネはん来られましたよ。何や、霊夢ちゃんと似たよーなことを言ったりしましたけど……」

「キツネ？ ……あ、八雲藍！」

霊夢は八雲藍とは面識があった。藍は八雲紫の式である。紫の命だろつかと、霊夢は思った。

咲夜が言った。

「何にしても気を付けなよ。今度は“弾幕ごっこ”とは違うんだから。私も今朝、変な人を見たんだ。白い髪をした悪そーなヤツ。どこで何が起こるかは分からないよ」

咲夜にそう言われ、霊夢は渋々頷いた。それはやはり、慧音や霖之助たちと同じような忠告だった。もう聞き飽きた、そう思いつつも、言いしれぬ不安は拭いきれなかった。

咲夜と霊夢たちは、揃って店を出た。

目の前を楽しそうな声が横切る。笑い合っ子供たちの声は、そのまま街中の方へ向かっていった。

そうしてシロとクロは、次なるターゲットに狙いを定めていた。ターゲットの男は、寄り道をすることなく真つ直ぐ寺子屋に向かっている。シロたちはその男の後を付けていた。

資料によると、その男は昔、妖怪に妻子を殺されているようだった。犯人は処罰されたが、以後、裏で過激な活動に参加するようになった。組織の武器に手を着けたのも組織の幹部が多くは妖怪だったかららしい。

高台から男を見るシロが呟いた。

「……そんな大層な奴には見えないがね。調査は正確なのか？」大した関心も見せずにシロは言った。

「よけいな詮索はするな。俺たちは言われたことを言われた通りにやればいいんだ」律儀にクロが返した。

「お堅いねえ……。ただの世間話さ。ジョークも解さないのかい？」

「沈黙は金、だ。覚えておくといい」

そう言つてクロが皮肉の笑みを浮かべた。

組織が指定した予定ポイントは、定休日でも無人になっている寺子屋だった。普段は人通りの多い場所だが、一度寺が閉まると誰も近付かなくなる。それを利用しての計画だった。

シロは地図を開いて現在地を確認した。ランデブーまで残り数キロ。時間はまだまだ余裕があった。

「しかしなあ……」

と、シロは思う。辺りは田園で人気もない。ここで始末してもいいのではないか。その方が余程安全で確実である。土地勘の無い場所ですぐに動くのは危険だ、それを最初に言ったのはクロの方であった。クロはあくまで計画通りにこだわっていた。

シロはさらに地図の詳細を眺める。組織が指定した寺子屋までの道筋を目で追ってみる。道のりは遠く長い。ひどく退屈だと思った。

「なあ、先回りした方が早いんじゃないか」堪え切れずにシロが言った。

「……俺もそう思う。だが、後をつけろというのが組織の命令だ」クロはシロの疑問にそう返した。「何か意味があるのだろうか」と。

「……分かんねえな」

「分かる必要もないさ」

シロは暇つぶしに先程拾った新聞を読んでいた。資産家の家で強盗殺人があったと記事に書いてあった。シロの信条は無駄のない仕事だった。殺す時はどんな残忍な手段も選ばないが、殺さない時はなるべく殺さない。品が無いなとシロは思った。

「無様だな。盗むなら見つからない様に盗むべきだ」唐突にクロが言った。

「何だ、お前もそう思うのか」驚いたシロが言う。

「まあな。お前もか？」

「当然だ。俺ならもつと上手く盗む」

そう言っただけの懐の神器をぽんと叩いた。クロは成る程なと言った。どちらともなく笑った。

また、例の男を目で追った。寺子屋までの道をぼんやりと歩いている。道中は異常なく、人の一人も通り掛からない。やはりどうしようもなく退屈だった。

しかし、そのせいか油断していたのかもしれない。シロたちは、その女の接近に全く気が付かなかったのだ。

「お前たち、何をやっているんだ？」

「……！」

二人は驚いて振り返った。背後には青い長髪の女が立っていた。不思議そうにこちらを窺っている。クロは慌てて言い繕った。

「いや、何でもない。初めての土地だね。少し迷っていたところだ」

「そうか。何なら案内しようか？」女はやっかいな申し出をする。

「問題無いよ。地図も手に入れた。のんびり行きさ」

慌ててクロがそう言っただけの女の申し出を断った。その女は少し訝し

んだが、その内に納得したように頷いた。

「そうだな。今日は天気も良いし。では、私は急ぐからこれで」
そうして女は去っていった。緊張の意図が解ける。青い長髪が優雅になびくのを、二人は茫然と眺めていた。

クロは驚愕する。女が向かうのは、あの男のいる方角だった。

「上白沢慧音、だったよな。なぜあの女がここに……？」

クロが呟いた。シロはその名を聞いたことが無かったが、よくない事態になっていることは察しがついた。

クロが引っ手繰るようにシロの新聞を奪った。もうスピードで視線を動かしていく。

しばらく調べると、新聞欄に妙な記事を見つけた。寺子屋に関する記事だ。それは小さく、ともすれば見落としてしまいそうな記事だった。

昨日の定食屋での事を思い出した。

クロは重大な事に気が付いた。

「待て。この寺、無人じゃない。ガキがいる。今日は定休日なんかじゃない」

そうして二人は顔を見合わせた。

「……」

その後、男の後を追っていくと、やはり寺子屋では通常通り授業が行なわれていた。室中には灯りが点り、子供たちの元気な声が木霊した。シロたちは無言で男を眺める。男は子供たちに囲まれて、笑いながらその中に入ってしまった。

クロは腕時計に目をやった。指定の時間はとうに過ぎていた。

「クソっ、だからあのとき殺^やつておけば良かったんだ！」

シロが言った。シロは不測の事態による焦りよりも、ターゲットを殺せないことが不満だった。

「やはり不可能か？」クロがシロに聞いた。クロはまだ作戦の継続

にこだわっていた。

「今から殺せば、ガキ共に見つかっちまう」冗談じゃないと首を振った。

「構わん。それくらい事後処理でどうにでもなる。何とか始末できないか」

「ふざけんな。分つてんだろう？　ここは俺たちの知っているような土地じゃない。こんなシケた仕事で御縄なんざゴメンだよ」

シロが慌てて言い捨てた。この地での仕事はまだ日が浅い。何がどう作用するか分からない場所で、そんなリスクを負いたくはなかった。

しかし、クロはシロとは違う考えを持っていた。クロはまだ諦めていなかったのだ。何か策はないかと思巡する。クロにとっては作戦の継続こそが重要だった。

「どうせこの土地からはすぐに離れる。組織の力を使えば、そのくらいの時間稼ぎは出来る。やれるな？」

クロはそうシロに言った。目には見えぬが、クロ眼光には有無を言わさぬ迫力があつた。

「……」

しかし、シロはクロの問いに即答することが出来なかった。

ターゲットを始末する事にはいささかの躊躇いもなかった。だが、シロはどうしても考えずにはいられないのだった。

昨夜に始末した男の顔は、それは酷いものだった。全身を流血で染め、暗い土蔵に埋もれたあの男。あんな姿を子供が見るのか。そう思うと背筋の凍るような薄気味悪さを感じた。

初めて引き金を引いた時のことを思い出した。熱い。焼けるような銃の熱を思い出した。

やがてシロが言った。

「……駄目だ。やつぱ出来ねえ」

「それは感傷か」クロは問う。「契約違反だ」と。

「違う。そんなモンじゃねえ。組織の不手際だ」シロは苛立ちなが

ら言った。

「お前の技量は知っている。それを見越しての依頼だろう？」

「だがリスクを負うのは俺だ」

「リスクの無い殺しなどない。違うか？」

二人の問答は続いた。結論はなかなか出ない。両者の主張は完全に相反していた。リスクを回避したいシロと、計画の履行を押し付く口。どちらの主張ももつともであるし、不可解なことなどは何も無かった。だがクロは、シロの言い分の中にとっても個人的な思いがあることも見逃さなかった。

……だが、やがて折れたのはクロの方だった。

「分かった。組織にはそう報告しておくぞ」クロは投げやりに言った。

「ああ。そうしてくれ」対するシロは懽然としながら返した。

自分の主張が通ったはずなのに、シロの気が晴れることはなかった。気付かなかった気持ち、気付いてはいけない気持ちに、シロはどう対処していいか分からなかった。

「まあ、俺だって、いい趣味とは思わないさ」クロが言った。

うるせえよ、シロは言葉に出さず呟いた。

「さて、このまま終わりでは具合が悪いな。どうにか挽回できそうか？」クロはシロに言った。

「当たり前だ。俺は教師って生き物がこの世で一番嫌いなんだ。必ず奴の眉間にブチ込んでやる」

「決定だな。隙を見つけて狩りを再開するぞ」

二人は寺子屋を抜け出した。男をようやく追いつめたのは、それから数時間後のことだった。

「手間を掛けさせやがって……。それでも教育者か？ あア!？」

街道を少し外れた廃屋。シロは偶然見つけた木刀で、男を滅多打ちにしていた。男の体には無数の痣が出来ている。まるで腹いせの

ようだと、それを眺めるクロは呆れていた。

「くっ、何なんだ！ お前たちは！」その男は叫んだ。まだ事態の把握が出来ていない様だった。

「下手な芝居は打つなよ。心当たりが無いとは言わせないぜ」

「何の話だ。私はお前たちなど……」

「二年前の事だ。お前はある組織にいたはずだ」

クロが重々しく言った。ようやく思い当たった男は、見る見る内に顔を青ざめていった。

「そ、そうか。お前たち奴らの」

「ご名答。ずいぶん逃げ回ったようじゃないか。もう十分だろう？」

シロはまた木刀で男を殴った。男は木の葉のように簡単に吹き飛ばされた。倒れ落ちた男の腹に容赦のない蹴りが入る。男は悲鳴を上げてえずいていた。

狂った暴力。まるで今までの理不尽を、全てこの男にぶつけるかのようだった。シロは何度も木刀を振るい、男を痛めつけた。体を動かしていれば何も考えなくて済む。そんな打算もあった。それゆえか、シロは自分が何かを落としたものにも気付かなかった。

「馬鹿野郎。いい加減にしろよ、シロ。懐から落ちた大事なものに気付かないのか」

クロが怒声混じりに言った。シロから零れ落ちた神器を見せる。言われてシロは初めて気が付いた。シロは全く悪びれもせず引く手繰る。その光景を、歪む視界の中で見ている者がいた。

「その紋様……。そうか。成る程な。お前たちだったのか」

男の声色が急に変わった。まるで自分の方が優位に立っているかのようだった。

床に伏していたその男は、シロの持っていたそれを確かに見ていたのだ。

「くくく。馬鹿な事をしたな。とんだ間抜け野郎だぜ。お前たち殺されるぞ？」

男は不敵に笑う。シロには堪らなく不愉快だった。

「……どうやら躰が足りねえらしいな」

握り直した木刀を振り上げる。それを見てでさえ、男の笑いは止まらなかった。

「お前たちの持っている“それ”。私たちの中で大騒ぎになっている。 “博麗神社の神器が盗まれた”とな。お前たちは、それがどういふものなのか全く知らないのだろう？」

「……どういう意味だ？」クロが聞く。シロは振り上げたままの姿で男を見ていた。

「くくく。八雲だよ。お前たちはパンドラの箱を開けた。アイツの逆鱗に触れちまったんだ」

八雲。 八雲紫。

シロたちもその名は聞いていた。組織から要注意人物としてリストアップされていた。この地の実力者だという。そして、どういう性質の持ち主なのか、シロたちはよく聞いていた。

「……雲行きが怪しくなってきたな」

クロが言った。 思えば先の調査ミスにしても組織の対応は妙だった。 まったくらしくない。 余りに些細なミスが続いている。 何かの力が動いているとしか思えなかった。

計画はどうする ? クロはそれが気掛かりだった。

「……問い合わせた方がよさそうだな」

クロが言った。 このまま男を殺すより、組織に確認したほうが賢明だと判断したのだ。 もし八雲紫が動いているとなれば、それこそシロたちの手には負えない。

「見逃してやる」

男にそう言ってシロを促した。 そのまま背を向けて歩きだす。 シロは不服そうだったが、振り上げた一撃だけ与えると、クロに従って歩き出した。 まだシロにも冷静な思考が残っている。 クロは少し驚いていた。

男をそのまま放置して二人は出口に向かった。 それで終わりにすれば良かった。 だが、その男の方こそ冷静では無かったのだ。

「ハッ、逃げられると思うなよ！ お前らはもう終わってんだ！
八雲に殺されちまえ！」

男の叫びが背中越しに伝わる。シロはびたりと立ち止まった。そのまま男の方へ振り返る。クロの制止はすでに遅かった。その手にはすでに銃が握られていた。

「……昔話の兎を知らないのか。最後の最後で余計な口を利く奴はなア……」

「シロ、やめろ！」

ひとつ。銃声が響いた。

男は眉間に暗い穴を空けて倒れた。その下に赤い池が広がっていた。シロはそれを幽鬼のような形相で見下ろしていた。

「……身包み剥かれて、塩漬けにされんのさ」

そして男は動かなくなった。

Side B

事件発覚から三日目の朝だった。霊夢たちは新たな情報を求め、夜雀の店に向かっていた。

ミスティア・ローレライの営む居酒屋は町の中心部にある。最近では昼間も営業しているらしく、店の近くでは美味しそうなウナギの匂いが常に漂っていた。ミスティアは商売柄顔が広く、様々な情報に精通している。犯人探しの参考人にはぴったりの相手だった。

「眠そうだな。霊夢」道行く途中で魔理沙が聞いた。

「眠くない」霊夢は眠そうな目で答えた。

「あんまり無理すんなよ」

「うるさい」

「やれやれ……」

魔理沙は軽く首をすくめた。こんな霊夢の態度にも少しずつ慣れ始めていた。だが霊夢の方は、そもいかないようだった。

霊夢は昨晩うまく寝付けなかった。色々な事があり過ぎて混乱していたのだ。神社のことを聞かされ、今まで聞いたことも無いような世界の話の聞かされ、霊夢の頭の処理能力では、すでに追いつけないでいた。

（なぜ、今まで知らなかったんだろう？）

そんな事も考えた。

しばらく進むと、ミスティアの店の看板が見えてきた。店内は大勢の客で賑わっており、表の通りにも客の声が漏れる程だった。

中に入ると店内はやはり混んでいた。昼時より少し時間をずらしたのだが、効果は無かったらしい。聞くと、夜勤が担当の主人は、今は仮眠をとっているとのことだった。無理を言っ呼んでくれるよう頼んだが、店主が現れまでに何か腹に入れておこうとも考えた。

霊夢はメニュー表を眺めた。

「へえ。割と安いんだ。これならまた来てもいいかも」

「それは違うな。安いメニューしか視界に入れてないからだろ」

「あ、今日の日替わりエビフライだって。私これにする」

「なら私は鳥そぼろ定食にしとこうか」

そうして二人は各々注文を終えた。

ウナギは高い。ゆえに分相応の品を頼もう。ウナギが自慢のこの店で、それが二人の統一見解だった。

ちなみに霊夢は一度この店を訪れたことがあった。以前、魔理沙に連れて行ってもらったのだ。その時はまだ屋台だった頃で、これほど大きくなっているとは思わなかった。

「ミスティア、けっこう儲かっているんじゃない？」 霊夢が言った。

「なにが。このご時世によく持っている方だよ。今日に来て良かったな。明日には潰れているかも知れない」

「でも賑わってるじゃん」

「だからだよ」

そうこうしている内に注文したものが運ばれてきた。霊夢にとっでは久々に豪華な食事である。財布と相談して一番安いものを注文したが、なるほど、結構なボリュームがあった。霊夢は、魔理沙の言う事もあながち冗談では無いかもと思った。

それを持ってきたのは少女だった。

「ミスチーはまだか？」 魔理沙が聞いた。

「……」

少女は小さく首を振る。まだということらしい。どうやら無口の様だ。

「あなたは妖怪なの？ 見たところ普通の人間じゃないようだけど」

霊夢が言う。少女に違和感を感じたのだ。彼女の背には羽のようなものが畳んである。しかし、妖怪の気配はまるで感じなかった。

「……」

少女がまた首を振った。よく見ると羽は作りものの様だ。何故そんなものを付けているかは、少女は答えなかった。

「大変だな。妖怪女将に牛馬のごとく働かされて」 魔理沙が冗談め

いた口調で言った。

「……………」

少女は今度は大きく首を振った。魔理沙は「そうか」と答えた。店の女主人、ミスティア・ローレライは夜雀の妖怪だった。

人外の多いこの幻想郷でも、妖怪への偏見は普遍的に存在していた。差別や価値観の違いから、両者の衝突は日常茶飯事である。そんな中、ミスティアのこの店は、店員にも客にも人妖の差は無かった。この場所では、誰もが平等にウナギを食べる権利を有する。魔理沙は、こういう人妖の在り方もあるのかと不思議に思った。

なのに。

なのに、本当に争いなど起こるのだろうか……………？

しばらくすると、一人の女が少女の背後から現れた。これからは妖気を感じる。少し釣り目の背の低いその少女こそ、主人であるミスティア・ローレライに違いなかった。

「こら、おちよん。客間にかかる時は頭巾とタスキは外せて言ってるだろう？」

いきなり手刀が浴びせられた少女は、驚いて後ろを振り返った。

「ったく。氣イ付けな……………で。あんたらだったかい。アタシに用があるってのは」

ミスティアは霊夢たちの方を見て言った。魔理沙が調子よく答える。

「おう、ミスチー。元気してたか」

「アンタらの顔見るまでは元気だったさ」

「ひでー話だな。私らはどこに行っても歓迎されない宿命らしい」
そうしてミスティアは、もういいから戻れとおちよんを下がらせた。そのまま向かい席に腰を下ろす。霊夢と視線が合うと、不機嫌に目を細めた。

「さて、例の事件の事が聞きたいんだろ。洗いざらい何でも話してやる。ピーちくぱーちく雀のように歌ってやるよ」

「あれ？ 知ってたの？」

霊夢たちは犯人についての心当たりを訊ねた。

「心当たりねえ……。残念だがアタシは何も知らないよ。よしんば知っていたとして教えられる訳がない」ミスティアはそっけなく言った。

有力な情報を期待した霊夢だが、先ほどの機関銃とは打って変わって短い回答だった。

「そこをなんとか頼むぜ。もうここだけが頼りなんだ」魔理沙が言う。魔理沙としても、そろそろ片を付けたい頃合いだった。

「馬鹿野郎。客の情報を売ったなんて知れたら店の信用に関わってくる。アンタも客商売やるなら覚えときな。信用するのはね、一番得難く一番失いやすいもんさ」

自分の魔法シヨップ（おままごと）と、この店を一緒にされては敵わない。痛いところを突かれた魔理沙は、早々に降参して会話から引込んだ。

霊夢だけが、それでも言うって食い下がる。

「お願い。どんなことでもいいの。何か知ってるなら教えてくれない？」

「そんなことを言われてもね。無いもんは出せねえ。店のメニューと同じさ」

相変わらずそっけない回答しか得られない。しかし、それでもと霊夢が迫った。ミスティアはいい加減煙たそうにしていたが、そうは言いつつも何かなかったかと模索し始めていた。そういう性分らしい。しばらく考え込んでいたようだが、急に思い出したように手を打った。

「……そうだね。妙といえばこの事件そのものが妙だよ」「え？」

「アンタら、八雲紫からは何も聞いてないのかい？」

ミスティアは霊夢に尋ねた。霊夢は首を振って否定する。

「うっん、何も。だからこうやって自分で調べてるんだけど……」

八雲紫。霊夢もその名を思い浮かべないではなかった。いや、

それどころか一番初めに思い浮かんだ名前だった。

紫に叱られる、霊夢はまずそう思ったものだった。

そもそも今回の事件は、紫自らが出てきてもおかしくない事件だった。霊夢などは真つ先に来てくれるものだと思っていた。それなのに実際は紫どころか、その使いである八雲藍さえ自分のところに顔を見せないのだ。

……何かがおかしい。

それもまた、霊夢を動かした原動力のひとつであった。

ミスティアは「だろうね」と頷いた。

「こんな大事が起こってね、八雲紫の名前がまったく挙がらない。臭うよ、こいつは。そういえば知ってるかい、霊夢。ホントはあの狐だって、ご主人様の意向を測りかねて独断で動いているんだ。肝心の八雲紫は不気味なほどに静かだ」

「でも、何か別の事情があったのかもしれないし」

「じゃあ、そいつはどんなことだい。八雲のことは博麗が一番知っているんだろう？ これより大事なことがあるのかい？」

「それは……」

八雲紫と博麗家の間には古くからの繋がりがあった。とりわけ紫は神事や行事などは厳しく指導していた。その紫が神社の危機になぜ動かない？ 今や博麗神社存続の危機であるというのに。なぜ紫が現れない……？

自問する霊夢だったが、しかし答えは出なかった。

「アンタもね、いろいろヤバイ話を聞いたんだろうさ。でもね、アタシは思うんだ。本当の本当にヤバイのは八雲紫の方じゃないかってね。 遺恨による人妖の衝突？ はん、怪しいもんさ。今さら過去の戦争をぶり返そうなんて、そんな肝の据わった奴はいやしな。少なくともウチに来るような奴らは皆そうさ。どいつもこいつも、日々の愉快が第一なんだ。そんな連中が革命も何もないだろう？」

ミスティアは冷めた口調で言った。魔理沙が口を出した。

「どついつ理由だろうと一度始まってしまつたら戦うしかないんじゃないか？ 例え誰も望んでいなくとも、だ。そんなもんだる戦争なんて」

「それさ。戦争なんて誰も望んじやいなんだ。全面衝突（ハルマゲドン）が起こつて得する奴は誰もいない。じゃあ、誰が何のために事件を起こしたんだい？」

「そりゃあ……？」 魔理沙は次の言葉が見つからなかった。

犯人の目的。

霊夢はそんなことまで考えていなかった。ただ犯人を見つけて神器を取り戻せばいい。そう思っていた。

何のメリツトがあるのだろうか。霊夢には分らない。争乱のきっかけさえ生み出しかねないパンドラの箱。それをあえてこじ開ける意味とは一体……？

「あれからね、みんなして口がお利口になつたよ。誰もかれも神経質になつて様子をうかがっている。アタシも、制服も、狐だつてそうさ。あの女がこれで済ませるはずがないのに、あの女は少しも動いちゃくれない。それが怖えのさ。何かの前触れのようにね」 ミスティアは皮肉交じりに言った。

「そんな……。オーバーだよ。いくら何でもそんなこと……」

あり得ない、そう言おうとして、しかし霊夢はそれ以上言うことが出来なかった。ふいに霊夢の頭の中で一つのシナリオが浮かぶ。

八雲紫が黒幕ではないか？

確証はない。だが否定できるだけの根拠もない。それでも霊夢は紫を信じたかったのだ。

「紫は違うよ。紫はそんなことしない」

「……まあ、アンタがそう思うんならそうだろうさ。別に断定したいわけじゃない」

ミスティはバツが悪そうに言った。それでもと続ける。

「確かに短慮はある。それは認めるよ。でもね霊夢、知ってるかい？ アタシらの寿命は短いんだ。せいぜい人間様の半分くらいなも

んさ。だから、どうしたってせつかちにものを考える。最悪を考えないではいられないんだよ」

ミスティアは店内の方に目をやった。先ほどの娘 『おちよん』
といった が、厨房で火をかけていた。相変わらず無口だが、花の様に笑う彼女は客たちからの評判も良い。そして彼女は、他の誰にも負けないくらい懸命に働いていた。

「どうだい。いい娘だろう？」

ミスティアが問う。その問いに霊夢も魔理沙も無言で肯定した。
ミスティアは満足そうに頷く。

「……おちよんはね、口が利けないんだ。それが原因かは知らないが、家族にも捨てられちゃった。それで今は住み込みで働いてんだ」
だから一言も口を交わさなかったのか。霊夢たちはようやく合点
がいった。

「他の奴らもそうさ。ウチで面倒見ている娘たちはみんなそう。どこかが欠けている。そして居場所を失くして、こんな場末の居酒屋に捕まっちゃうんだ」

ふう、とミスティアは溜息を吐く。おちよんが見られていることに気付き笑った。そんなことより仕事をしると、ミスティアが片手であしらった。

「店をでかくしたのはその為か？」

魔理沙が問う。その娘たちを養うためかと。それだけじゃないさとミスティアは言った。

「不憫なもんだよ、アイツらは。散々こき使ってやるが持たせてやる銭が無い。たまに暇をやっても、着ていく服が無いもんだから、裏で仕込みをやってたんだ。アタシは自分^{てめえ}が情けないよ」

ミスティアはそう皮肉に笑った。霊夢たちは黙ってミスティアを見ていた。

「だからさ、アタシにも立場ってモンがあるんだよ。アタシはあの娘らを路頭に迷わすわけにはいかない。アイツらにや他に行くところがねーんだ。アタシが砦になってやんなきゃならねえ。そりゃあ全

部ほつぱり出しや楽かもしれねえ。でも、それじゃあアタシは愉快じゃねえ。背負うモン背負わねえと、アタシはハッピーじゃねーんだよ」

ミステリアはそう静かに言った。それは背負う者の言葉だった。責任、矜持、そんな諸々を内包した言葉だった。そして、霊夢たちには、そんな言葉に反論するための語彙は持たなかった。

「誰がやったのか。どんな目的があるのか。正直、アタシにはそんなことはどうでもいいんだ。ただ考えるのは、どんな累が及ぶかってことさ。徒競走が始まったその瞬間、アタシはどこに立っているか。それが心配でならねえんだ」

そこまで言って、ミステリアは急に居住まいを正して霊夢たちに向き直った。

「頼む、霊夢。これ以上アタシの店を巻き込まないでくれ。アタシに事件の事なんて聞かないでくれ。余計な首を突っ込んで火の粉被るのはゴメンだ。まして爆心地なんざ猶更だ。だから頼むよ……」
そうしてミステリアはその小さな頭を下げた。その肩はひどく弱々しく見える。だがその一方で、実はとてつもない重圧に耐えている強靱な肩であることを、霊夢たちはもう知っていた。

「……分かつてる。もう分かつてるよ、ミステリア。別にそんなつもりじゃなかったんだ。霊夢も、もういいだろう？」

魔理沙が霊夢に促した。霊夢は目を少し伏せて頷く。

「うん。ごめん、ミステリア」

「……そうか。そいつはよかったよ」

そうしてこの話は終了した。ミステリアはほつと溜息をついた。その安堵の表情を見た霊夢は、とても申し訳ない気持ちになった。用の無くなった霊夢たちは、ミステリアの店を出ることにした。

「それじゃあ勘定を頼むぜ」

と言って魔理沙が手を伸ばした。霊夢から預かった分と自分の分。財布に余裕はないがツケに回すのも憚られた。しかし、魔理沙の配慮はミステリアの手によって制止された。

「……おい、霊夢。よく聞きな。今日の分はツケにしておいてやる。だから、また来るんだよ。ちゃんと“自分の足”で返しに来るんだ。いいね。分かったかい？」

定食屋の女将ミスティアは、すっかり元のミスティアだった。勘の鋭さも、優しさも、すべて元通りだった。迫力に押された霊夢は、ただ従うしかなかった。

「分かった。約束するよ」

そうして霊夢たちはミスティアの店を後にした。

一晩明けると、シロたちの立場は確実に危うくなっていた。

「……どうだった？」シロがクロに言った。

「駄目だ。まるで繋がらない」クロがそう答える。

「くそつ。連中、俺たちを切りやがったのか」

シロが腹立たしげに言った。クロは神妙な面持ちでそんなシロを見ていた。

あれから組織からの連絡は途絶えていた。P nと名乗った女が渡した連絡先は、常に通話中で繋がらなかった。最後の通信は、ターゲットを補足した直後。以降は何も連絡は無く、また、こちらからの連絡する事も無かった。

クロは何度となく通信を試みたが、しかし、組織からの応答は無かった。受話器の向こうは沈黙を保ったまま、それが事態の深刻さを一層際立たせていた。

シロたちは何の説明も無く危機の渦中いるのだった。

最初の襲撃は、例の男を殺害した夜のことだった。明らかに一般人とは違う気配を持つ者たちが、シロたちの泊まる宿に押しかけた。いち早く勘付いたシロの機転が無ければ、その宿は戦場となっていただろう。以降、何度となく危機の気配はシロたちに迫っていた。そうしてシロたちは情報収集に奔走した。シロたちはあまりにこの国の事を知らない。それが危機に繋がっているのなら、まず初めにすることだろうと思われた。そして、博麗神社から盗んだ神器、二つの勢力や八雲紫の関係を知るに至り、ようやく自分たちが何をさせられたのかを思い知った。同時に、裏で糸を引いている組織に激昂せずにはいられなかった。

「……ちつ、やられたぜ。初めから仕組まれていたみたいだ」
シロが言った。

「よせ、シロ。そうと決まった訳じゃない」

クロは頼りなく首を振る。

「お前はそうかもしれねえ。だが、俺は雇われただけの何でも屋だぜ。連中が同情してくれるとは思えない」

まだ分らん、クロはそう言っただけでクロを嗜めた。だが、現状ではクロの言い分の方が分があるのだった。

もし何らかのアクシデントがあったのなら、連絡の一つもするべきであった。そうでなくともこの状況なのだから、組織の意図を疑うのは仕方ない話だった。とくに直属の構成員であるクロと違い、シロはただの使いっばしりだった。シロの不安も当然であった。

「連中は初めから俺を切るつもりだったんだ」

シロは言う。思えば妙だったのだ。引き渡しの不手際に始まり、組織の下す指令は支離滅裂なものばかりだった。山奥に向かったり、湖に向かったり。無駄な動きをさせてシロたちを走り回らせた。もっと効率的な手段はあるだろうに、まるで自分たちの存在をアピールしているようだった。

極めつけは寺子屋の情報ミスだ。あれは有り得ないミスだった。狡猾な仕事を常套とする組織には考えられないミス。別の思惑があるのではと考える方が自然だった。

「……これからどうする？」シロが聞いた。

「しばらく情報収集に専念する。二手に分かれよう」

「二時間後にこの場所に集合する。それでいいか」

「ああ。敵襲に気をつけろよ」

そう言っただけでクロはシロに背を向けた。おう、と言っただけでシロは別れる。瞬間、シロはおかしさが込み上げてきた。何故だか本当の相棒のように思えたからだ。組織のことはもう信用出来ない。巨体を揺らし歩くクロの背中が頼もしく思えた。

（だが、待てよ？）

シロの脳裏にある考えが過る。今まで無意識に排除してきた考えが、一人になった今、シロの思考を侵食し始めた。

（ならば、クロはどうなのだ？）

本当に今さらだが、クロも組織の人間だった。組織が裏切ったならば、クロも関係している可能性が高い。本当にクロを信用してもいいのだろうか。

全ては憶測だった。クロ自身、組織の対応には動揺していた。シロの目には確かにそう見えた。それに、今になって芽生えたクロへの信頼は、シロにとって得難いものだった。

「……」

急に煙草が吸いたくなくなった。ポケットの中を探すと、潰れた空き箱のみが現れた。顔をしかめながら懐を探すと、何か硬いモノに手が触れた。それは神器で、騒動の発端となったものだった。

神器を取り出した。目の前に掲げてみると、それは不思議な色をしていた。

二時間後、再会はクロの怒声から始まった。

「何イ！？ 神器を売っただと！？」

クロの声が木霊した。シロはあまりの音量に鼓膜の危機を感じた。「うるせえな。ゴチャゴチャ言うな。あれのせいでこんな事になっただから、あれさえ片付けちまえば面倒はないじゃねーか。でも、だからって捨てるのは惜しいし、となりゃあ後は売るしかないだろうっ？」

「お前……」

クロは言葉にならないといった風でシロを見た。実際、次の語句がなかなか次げなかった。対するシロは何とも気楽なものである。

「店主の目は節穴だな。大した金にならなかった。聞いたことあるか？ 『香霖堂』って名の古物商だ。白髪眼鏡の冴えない兄ちゃんだったよ」

シロは情報収集のついでに古物を取り扱っている店を探していた。もしかしたら、一気に面倒ごとから解放されるかもしれないと踏んだからだ。そしてそれは面白いほど上手くいき、店主はさして疑う

こともなくそれを買い取った。

「組織には何と説明する気だ」

「説明も何も連絡が繋がらないじゃないか」

「それはそうだが……」

そう。それは確かにそうなのだが。しかし、そういう問題でも無いのは確かだった。

これで、とクロは思う。これでシロたち帰る場所を完全に失った。組織への明白な裏切り行為だ。組織がそれを許して迎え入れてくれるなど、それこそ天地がひっくり返っても有り得そうになかった。

「クロ。博麗神社の伝説を知っているか？」

シロが突然尋ねた。どういう意味だとクロが問う。

「これも道具屋の兄ちゃんに聞いたんだがな……」

シロの話は『外の世界』に関するものだった。

幻想郷は『外の世界』から隔別された地に存在する。それはこの幻想郷では普遍的な事実として受け入れられていた。確かにこの国は、こんな狭い土地では考えられないほど物資が流通しているし、産業の発展も目覚ましい。当然、それがあの町からの搾取であることはシロも知っていたが、だが、それでは説明の付かない領域も存在した。

本当にどことも繋がりがなければ、それこそ土器の時代程度の文明しか確立できないだろう。みな口にして言わずともその空気はあった。そんな現状もあってか、外に別の世界があることは誰もが了解していたのだ。

しかし、それがどこにあり、どうやって行けるのかは全くの謎に包まれていた。確かに外部の接触があるはずなのに、こちら側からのコンタクトは全く取れない。その理由を知る者も全くいない。完全な一方通行である。まるで、見えない巨人たちがディスプレイ越しに眺めている箱庭のような場所。それがこの幻想郷なのだった。

「だが、あの兄ちゃんの話によると、唯一外部との接触が取れる場

所があるそうだ」シロが言う。そして、その場所こそが博麗神社
などということらしい。

博麗神社は変わっていた。神社の鳥居というものは、拝殿本殿へ
真っ直ぐに至る参道の入り口に構えるのが常だった。多少のずれは
あっても、拝殿へ続く案内看板という意図は変わらない。だが、博
麗神社には裏手にはもう一つ鳥居があつて、それは神社から外側を
向いて設置されていたのだ。

道具屋の話に曰く、それこそが外の世界への入り口なのだそうだ。
つまり、そこを潜って森を抜ければ、外の世界に出られるのだ。

だが当然、そこからの出入りは容易では無かった。入り口は結界
の札で塞がれているのだ。札は強力で普通の人間には触れることも出
来ない。だが、結界の札は毎日張り替えなければ効力を失っていき、
ついには普通の人間でも剥がすことが可能になるらしい。神社の管
理人である娘は、事件以後ひどく落ち込んで、札の管理にまで手が
回っていないそうだ。今こそが脱出のチャンスなのだった。

「……眉唾もの話だ。それに俺は、外に世界があるとは思ってい
ない。核か何かでとつくの昔に滅んでまった、世界は幻想郷^{こゝろ}だけで、
ここのみで完結している。そう思っている」

クロがそう言った。それもまた、よくある意見の一つだった。

「俺も半信半疑さ。だが、上にも下にも居場所は無いんだ。それに
賭けるしかないだろう?」

「札が新しく張り替えられていたらどうする」

「なに、その時は神社の娘を脅して剥がさせればいいさ」

「……」

そしてクロは沈黙した。

おかしな心境だった。クロはシロの話を聞いているうちに、本当
に逃げられるのではという気持ちになつていった。シロはこの幻想郷
から居なくなる。外の世界に飛び出すのだ。あまりに突飛な事態に
まるで実感が沸かなかつた。

シロがクロの方を向いた。

「なあ、クロ。俺と一緒に逃げないか」
それは予想もしていない言葉だった。

「なぜだ。俺は組織の人間だぞ」

「組織はお前を切り捨てた。居場所が無いのはお前も同じだろう？」
「それはそうだが……」

しかし、クロは言い淀む。それでもクロは迷うのだった。

シロの言葉を信用していないわけではなかった。この男がそう言うなら、本当に出来るのかもしれない。何故かクロは、シロに対してそんな気持ちを抱いていた。だが、

「悩んでいる時間は無いんだな」

「まあな。そして選択肢もあまり無い」

シロは言う。組織に戻ることは不可能だろう。そして、この地に留まり続けることも難しい。確かに残っている選択肢は少ないように思えた。

クロはシロの目を覗きこんだ。思わず溜息を吐いた。

「……分った。それも悪くない、かもな」

そうしてクロは決断した。クロは組織と決別を覚悟した。まだ不安はあったが、この男になら賭けても良いのではと思った。

シロが、そんなクロに言葉をかけた。

「じゃあ、クロ……、いや、よろしくな“相棒”」

クロは不思議な顔をした。

「相棒……？」

「何だよ。ノリが悪いな。俺たちは道連れだろう？」

シロが笑う。ようやくクロにも実感が湧いてきた。

「……そうだな。頼むぞ“相棒”」

そして、その響きはクロにとっても、シロ自身にとっても新鮮に響きだった。

「まずはメシでも喰いに行くか。この間のウナギがいいな」

「そうだな。腹が減っては何とやらだ」

「じゃあ行くこう」

「ああ」

そうして二人は歩き出した。

ミステリア店から表通りに出た。外は微妙な空色をしていた。
霊夢の後ろから魔理沙は言った。

「……まだ続けるのか？」

霊夢が後ろを振り返ると、魔理沙は仁王立ちのようにして立っており、じっとこちらを見ていた。

「……何よ。ビビってんの？」

「ああ、そうだ。怖いよ。怖くて怖くて堪らない」

通りすがりの人間が、魔理沙の異変に気が付いた。不思議な顔で魔理沙を眺めていた。魔理沙は霊夢の顔を真っ直ぐ見据えている。冗談で終わらせるつもりは無いようだと言夢にも分かった。

「何ですよ。もうすぐ黒幕に追いつけそうなのに」

霊夢は苛立たしげに言った。

「追いついてどうするんだ。私が気掛かりなのはその後だよ」

しかし、魔理沙は動じず答えた。

「決まってるでしょう？ 犯人を見つけたらポッコポッコにしてやるんだから」

「そっかい。じゃあ聞け。お前にそれが出来るのか？ 本当に来ると思っているのか？」

「それは……」

そして霊夢は二の句に困った。だが、それは真実、今こそ考えねばならないことだった。

実を言うと、霊夢もそれについて考えないでは無かった。犯人を見つけ出し、神器を取り戻す。初めはそれだけが目的だった。だが、ミステリアたちの話を聞くにつれ、目的を達成する為には、途方もない力が必要なのだと分かった。

（自分にその力があるのだろうか……？）

霊夢は決断を先延ばしにしていた。

「私は事件の黒幕に気付いたぜ」

魔理沙はさらりと言った。

「え？」

「もつとよく考えるべきだったな。右でも左でもないなら、上か下かしかない。お前はあいつを疑いたくないんだろう？　なら、答えは一つだ」

上で戦争を起こして愉快な奴らは限られてくる。それに気付いたとき、魔理沙が一番可能性の高い真相に辿り着いた。彼女たち以外に考えられない。それが魔理沙の結論だった。

「決まりだよ。理由も十分だ。だからこそ聞いている。『犯人を見つけてボコボコにする』。それが本当にできるのか？」

霊夢は答えない。また下を向いてしまった。

「らしくねーぜ、霊夢。お前はもつと賢い奴だと思っていた」

「勝手に決めないで。魔理沙に何が分るって言うのよ」

「分からねーさ。でもな霊夢、私たちに犯人を取り押さえる力は無い。それだけはハッキリ分る。知ってるか、霊夢。自信と過信。これをハキ違える事を“慢心”って言うんだぜ？」

魔理沙は語調を強めていった。霊夢はそれに言い返せない。一度反論の口を開きかけたものの、しかし続ける言葉が見つからなかった。魔理沙は畳みかけるように言った。

「霊夢。もう分かっただろう？　これ以上は誰にとっても愉快な話にはならない。誰にとつても、だ」

霊夢は沈黙する。否。それしか出来ない。

「誰にでも領分つてもんがある。これ以上は私たちの守備範囲の外だ。命の保証なんか何処にも無いんだよ。それに私らは女だ。下手すりゃもつと酷い目に遭うかもしれない。もう遊びじゃ済まされない」

魔理沙の言葉は激しさを増した。そんな魔理沙はますます人目を集める。霊夢は居た堪れなくなつて逃げ道を探した。しかし、魔理沙の瞳はそれを許さなかった。

「もう十分だよ。霖之助には止められた。慧音にも釘を刺された。咲夜やミスチーだって私らのことを心配している。もういいだろう？ これ以上やって何になる？」

「だって、あれは、あれが無いと私の神社が……」

霊夢はうるたえながら何とか口にした。それを魔理沙は切って捨てる。

「なあ、霊夢。冷静になれよ。お上はもう捜査を始めてるんだ。何の為に高い税金払ってんだよ。存分にこき使ってやればいいさ。それに狐だって動いてる。遅かれ早かれ神器は戻ってくる。それでいいだろう？」

魔理沙の追求は止まらない。霊夢の声は弱々しくなるばかりだった。

「でも、もしかして……」

「無ければ無いで構わないさ。神社が倒れようが命を取られる訳じゃないんだ。慧音も言ってた。一番大事なものが何か考えろって。何か別の商売でも始めればいいさ。バイト先では重宝されてんだろう？」

霊夢は神社の副業として蕎麦屋でバイトをしていた。そして、その評判は決して悪く無かった。

「……そんなことないもん」

「なら別の何かでもいいさ。それを考えるのは今でなくてもいい。だから、頼むよ。もう止めにしよう……？」

そうして魔理沙は、霊夢に懇願したのだった。それはとても魔理沙には見えなかった。霊夢は魔理沙とは長い付き合いだが、こんな魔理沙は見たことが無かった。魔理沙がこんな風に人に頼むことは絶対に有り得ないことだった。

「……」

だが霊夢は答えない。何も答えようとしない。白々しい風が吹いた。

「霊夢……」

魔理沙が呼びかける。それでも霊夢は答えない。まだ何も答えない。時間だけが進んだ。

魔理沙の不安はますます重くなっていった。寂しさで押し潰されそうだった。すぎるように霊夢へ視線を送った。霊夢は怯えた顔をしている。魔理沙はひたすら待ったのだ。

霊夢が口を開いた。

「でも、私は……、」

「　　なんでなんだッ!」

そして魔理沙は暴発した。

魔理沙の顔は泣きだしそうだった。魔理沙自身、どうしていいかわからなかった。いよいよ通りが騒然となる。しかし、それでも霊夢は黙って下を向いていた。

「霊夢。お前が本当に怖れているのは何なのか、私には分らないんだよ。なぜそんなに怯えているのかも分らない。でも、今のお前は普通じゃないし、それを必死で隠しているように見える。お前が甘いものを欲しがるのは緊張している時だ。それが分るくらいには、私はお前のことを知っている。それでも、私じゃ駄目なのか……?」

霊夢はやっと顔を上げた。その顔も泣き出しそうな顔だった。しばらく悩んだが、結局、違う答え口にした。

「知らない。魔理沙が何を言ってるのか、私には分からない」

霊夢はそう言っただけ下を向いた。

「……そうか。なら、これが私とお前の距離なんだな」

それならそれでもいいさ。魔理沙は少し寂しげに呟いた。

「霊夢。私はもう降りるぜ」

魔理沙が言った。

「え?」

「私が手伝えるのはここまでだ。後はひとりでやってくれ」

分水嶺だよ、魔理沙はそう続けた。魔理沙はついに決断を要求したのだ。決断とは自分の意思で道を選び、他の道を選択しないことだ。魔理沙はそれを要求したのだ。

「そんな……」

霊夢は動揺を隠そうともしない。その時が来るのは分かっていたはずなのに、霊夢は未練がましく魔理沙に言った。

「約束したのに……！」

「友達がいがなくて悪かったな。私は何と言われようとここで降りる。これから先どうなるかは分からない。だが、例え何がどうなつたとしても、私を恨まないでくれよ」

魔理沙のその言葉は、容赦なく霊夢に突きつけられた。霊夢は魔理沙の瞳に助けを乞うたが、しかし、その浅ましく愚かな所業は頑として跳ね付けられた。

「嘔吐き……」

「何とでも言ってくれ」

「約束だったのに……」

そして霊夢は、しばらく時間を要した。魔理沙も律儀にそれを待っていた。答えは決まっていたのに、口に出すのは勇気が必要だった。

「……分かった。魔理沙がそこまで言うなら、私もここで終わりにする」

ようやく、霊夢はそれを口にした。

「それでいいんだな？」

「うん。ごめん、迷惑かけた」

「……悪いな霊夢。やっぱり霊夢は親友だよ」

ようやく魔理沙が笑った。

そうして、霊夢たちは各々の場所に帰ることにした。

陽が陰つてくると、少しだけ雨の匂いがした。雨が降れば困ったことになる。鳥居の護符が剥がれてしまう事があるからだ。

魔理沙が先に走り始めた。霊夢も後を追うように駆け出した。走りながら霊夢は、「ごめん」と、もう一度だけ魔理沙に伝えた。

Side A

どうにも空がかき曇ってきた。

あの日と同じ雨の匂いである。ひと雨来るかもしれない。そうすると面倒だなとシロは思った。

シロとクロは連れ添って博麗神社を目指していた。道中、追っ手の気配はそこいら中にあつた。あまり目立つ様な行動は出来ない。二人は慎重に歩を進めていった。

人の気が薄くなり、緑の際立つ小道を抜けると、山道の前に石で出来た鳥居が見えた。あれを登り切った後に博麗神社はある。二人はどちらともなく立ち止まった。

「いよいよだな」

「ああ。やるしかないな」

二人はそんな言葉を交わした。ふふと互いに笑った。

思えば奇妙な話だった。ただの単純な盗み。いつもと変わらない普通の仕事のはずだった。それが何をどう間違ったか、幻想郷の全てを敵に回すことになってしまった。そして自分たちはそんな幻想郷から逃げだそうとしているのだ。

神社の参道には燈明が点っていた。主は在室なのだろう。却って都合が良いと、シロは思った。

シロは石鳥居に手を掛けた。それは固く、そして冷たい。まるで死体の様だった。その姿こそ、自分たちの未来を暗示しているかのようにだった。

そつと、ホルスターの銃身に手を伸ばした。いよいよお別れだった。しかし、他愛もない感傷に浸っていたためか、クロが何をしているのかその時まで気付けなかった。

「！！！」

乾いた発砲音。シロの意識が理解に及んだ時、シロは大地の上に伏していた。

「……なんだよ」

「今さらだな。組織からだよ」

クロが冷たく答えた。クロの手には細長い筒、即ち銃が握られていた。銃口からは硝煙が漂う。シロはどこが痛いのか、まだ見当が付かずにいた。

「お前と一緒に逃げる。それも良かったんだがな。どうやら俺は最後までこうだ」

クロはそう言った。ほんの数十分前だった。クロと組織との連絡が繋がったのだ。クロはシロでは無く、組織の方にその身を靡かせた。

「……痛えな。こりゃあ」

「だろうな。俺も昔喰らったことがある」

クロは一瞬笑ってみせた。それはむしろ、シロがするような皮肉な笑いだった。

「こういう気分になるんだな」

「そうだ。最後に味わってみるのも一興だろう？」

「考えたことも無かったぜ」

シロがくくと笑った。しかし、クロが笑うことはもうなかった。いよいよ縁が切れたのだとシロは悟った。

クロは小型の通信機を取り出した。何かしらの操作をすると、それをシロの眼前に放り投げた。通信機の赤いランプが点っていた。

「褒美だそうだ」

シロは、まだ動く片方の手でそれを手繰り寄せた。ザ、ザ、と雑音のみが聞こえていたが、ふいに聞き覚えのある声が通話口から漏れた。

それはあの女の声だった。

『おめでとございませす、シロ。これで全ての任務は完了しました。ご苦労様でした』

シロはこの声には覚えがあった。口調こそ違えど、それは交渉役の女、P nの声とまったく同じだった。

「憎らしいな。わざわざそんな事を言うために止めを刺さなかったのか？」

『ボスがどうしても仰りまして。くく。ボスは上機嫌だよ。あんた達はアタイらの予想を遙かに上回る結果を残してくれた。アタイとしても、まさかここまで上手く立ち回ってくれるとは思わなかったよ』

通話口の向こうは平然と言ったのけた。シロは怒りよりも脱力を感じた。

「けっ、最後まで踊らされていた訳か。クロは全部知ってたのかい？」

『いいや。あれは末端だからね。でも、あれの思考パターンを考慮して計画が実行されたのは事実だよ。実際、あれも良い働きをしてくれたしね』

その女は砕けたな口調のまま答えた。何の抑揚もない。その女にとっては、この事件の事さえ、全く普通のことではなかったのだ。……頭痛がする。シロには、もう会話を続ける自信が無かった。

「あんたとは話したくない。おたくらのボス替われ」

『……いいよ。待ってな』

女がそう言うと、受話器の向こうが曇った。何かしら会話が行なわれた様だった。シロがしばらく待っていると、女は自分の主人に受話器を譲った。ついに黒幕が口を開いた。

『初めましてだな、シロ。よくやってくれた。私はお前の働きぶりに感謝している』

それは、先程の女よりもさらに若い女の声、いや、幼い声だった。だがシロは、その声に言い知れない威圧感を覚えていた。

「言ってくれな。よくも俺をハメやがったな」

『くく。人聞きが悪いな。はじめに見限ったはお前の方だろう？

私はお前に神器の奪取を依頼したのだ。そしてお前は見事依頼を達成し、私は不足なく報酬を支払った。さらに次の仕事も斡旋してお前の面倒を見てやっていたのに。……クロから聞いたよ。神器は

流したらしいな』

「はっ。あんなもん持って歩けるか。何度死にかけたと思ってやがる。お前はあれがどういう類のものか、知っていたんだらう?」

シロが畳みかけるように黒幕に迫った。黒幕からの声が届く。

「もちろんだ。私は神器の重要性をよく理解していたし、それが失くなればどうなるかも知っていた。そんな事は織り込み済みでお前に仕事を依頼したのだ」

「あっさり言ってくれるぜ。……戦争か? それがお前の目的なのか?」

シロが黒幕に聞いた。実際、その可能性しかないと思っていた。

『無論だ。それ以外に何がある』

そして黒幕は、シロの予想通りの答えを寄越した。

「土地のことか? 何故そんなモノにこだわる。もう手遅れだらう?」

シロは言った。彼女らという組織がどういった状況の元に結成された組織なのか、すでにシロは知っていた。理由は分からないでも無い。だが、何にしても今更だという気がしたのだ。

『ふん。お前には理解できんだらうな。お前はしょせん余所者だ。』

我々の屈辱の日々など想像もできんだらう。 奴らは卑怯な略奪

者だ。奴らは我々の土地を奪い、我がもの顔でそれを闊歩している。

我々からの搾取が無ければ日々の生業さえ覚束ぬというのに。そんなことさえ忘れているんだ』

それは滾る怒りを何とか押し止めているような言い方だった。：

…奥歯に力が入り過ぎている。シロはそう思った。黒幕はさらに続けた。

『だが、我々はそれを良しとしないのだ。我々は必ず取り戻す。奪われたものを我々の手で奪い返す。妥協など有り得ない。我々はその達成のために、いかなる手段の行使も厭わない。 聞け、シロ。我々は力を手に入れたのだ』

黒幕はそこで言葉を区切った。通話口の向こうから笑いが漏れる。

「……どういう意味だ」

『そのままの意味だよ。我々はついに手に入れた。我々の悲願を達成するに相応しい力を。無慈悲かつ圧倒的な力を。……くくく、なあシロ。これほど愉快なことがあるか？ 奴らは全てを奪っていった。だが、手に入れたのは我々の方だ。神の思し召しとしか思えん陽の光から隔絶された我々が、“太陽の力”を手に入れたのだ』

のどの奥が、ごくりと鳴った。

その指す意味を、シロはよく理解していた。

『我は死なり。世界の破壊者なり』。……くくく。聖戦^{ジハード}だよ。平和面した偽善者どもに思い知らせてやる。殺して、壊して、焼き払って、蹂躪し尽くしてやる。卑怯な略奪者どもの居場所はない。地獄の業火を見せてやる……!!』

シロの頬から、汗の滴が落ちた。

知らなかった。自分がこれほど大量の汗をかいていることに。シロは気づかなかった。

……。
……。
……。

狂気だった。

寸分の誤差もなく、正しい狂気だった。

理解が追いつくのに、シロは多少の時間がかかった。

『分っているぞ。本気でやるつもりなのか、だろう？ お前が何を考えているのかなど、心を読まずとも分る』

黒幕はシロより先にシロの問いを提示した。

「そんなことが出来る訳が無い」

シロは言った。「頭がいかれてる」

『そう不安がるなよ、シロ。心配するな。それは今ではない。確かに私の最終目的はそれだが、これは最初のステップでしかない』

黒幕はあしらう様に言った。

「まずは挨拶ということか」

『くくく。惜しいな。もう少しロマンティックに考えてくれ。これはそう、私から奴らへの“恋文”なのだ。とっておきのラブレターだよ。私は今回の件を通して奴らにメッセージを送った。それが全てで、それだけが真実だ』

それは、うつとりする様な声色だった。声のトーンだけならば、夢見る少女と変わらない。まるで愉快的悪戯を思い付いた少女のよう。それが逆に恐怖を駆り立てた。

『忘れるな。我々はここにいる』……さて、おしゃべりが長くなったな。ああ、お前の処理については、お前に銃口を突き付けている男に一任してある。せいぜい仲良くしたまえ。あれがどういう判断を下すかは知らんが、また会える日を楽しみにしているよ』

ブツリと、そうして声は完全に沈黙した。突然始まり、突然終わる。まるで台風の様だとシロは思った。

クロを見上げた。すると、クロは静かにシロを見据えていた。何を考えているのかは分からない。ただ無表情に筒の先端をシロに向けていた。

「……どうする気だ？ クロ」

「立て。傷は浅いはずだ。ケリを付けよう」

「バレてたのか……」

クロに促されて、シロはゆっくりと身を起こした。傷口が痛む。

だが、クロの言う通り銃創は浅く、はじめから致命傷は避けていたことが分かった。

「……俺たちは悪党だ」

クロが重々しく口を開いた。

「悪党には悪党の道理がある。俺に与えられた仕事は、お前を監視して妙なまねをさせない事だ。お前が独断で行動を起こせば、俺はそれを正さねばならない」

クロは言った。「それが道理だ」と。

「だが、お前の飼い主がもう良いつて言ってんだ。こだわる必要は無いだろう？」

シロは肩をすくめて言った。だが、そう言いつつもシロは頭の片隅では理解していた。

もう戻れない。

シロはシロで行動しなければならなかった。

「なあ、シロ。俺たちは人を殺す。それで飯を喰っている。誰かの愉快を犠牲にして、自分の愉快を優先している。ならば、俺はルールってもんに従わなきゃいけないんだよ」

クロは言葉を繰り返す。思えばクロはずっとそれに拘っていた。

「組織は俺を元に戻しても良いと言った。お前の首さえあれば、俺はまた組織に戻る」

「お前、信用してないだろーが」

シロが呆れて言った。

「当たり前だ。そんなに甘い話とは思って無いさ」

当然だろうとクロは言った。そんな話を信じられる訳が無い。だが、それでもクロは組織の方を取るのだ。

「悪いな、シロ。俺は駄目だ。俺にはお前の様な勇氣は無い。悪を悪と認めたまま生きていける自信が無い。認めたくねえのさ。俺は悪くない、俺は命令通りに動いているだけだつてな。組織の奴らだつてそうさ。テメエの不条理をここの連中のせいにしてるだけだ。そうして全部誰かのせいになれば自分の身が軽くなる。そうしていなきゃ、テメエの犯してきた罪の重みで潰れちまうんだ」

クロは言った。そして、それがクロにとつての“人殺しの免罪符”だった。

「俺は強くないんだよ。シロ」

クロはしみじみと言った。シロは口を開いた。

「だからそうやって自分を騙していくつてわけか。……俺は分ってるつもりだぜ、クロ。いつだって選択肢は限られてんだ。俺たちはその中から最善を選んだ筈だった。でも、それが本当に自分が望んでいた未来への切符かは、なってみなきゃ分からねーんだもんな」

シロは諭すようにクロに言った。まるでシロらしくないと、シロ

自身でも思った。

シロはさらに続ける。

「難儀なもんだよ。俺も。お前も。何が悪いのか、何が正しいのか。そういう善悪の価値観じゃ測れない。だが、立派に罪状だけは付いて回る。普通はな、そうこうしている内に頭の中がぶっ壊れて、悪を悪とさえ思えなくなるんだ。だが、お前はそうなれなかつたんだな」

かつてはシロもそうだった。人を殺すのは自分の命の為だった。延命の為、生活の為、その手段としての殺人のはずだった。

いつからだろう。シロは引き金を引く時、熱さを全く感じなくなつた。淡々と目の前の獲物を血で染めた。その時シロは、肩の荷が降りた気がしたのだ。

クロはまだ、その荷物を抱えていた。

「そうかも知れないな。全く難儀な話だよ」

だが、いくら願っても過去には戻れない。選択は変えられないし、犯した罪も無くならない。

シロが聞いた。

「お前はこれからもそのルールつてやつに従うつもりなのか？」

「与えられた仕事のみを完全に遂行する。それが俺のルールだ。それを破ることなどあり得ない」

クロは当然の様に答えた。

「なるほどな。融通が利かないって言われるか？」

「いつもさ」

「馬鹿だよ、お前」

まったく、本当に馬鹿な奴だよ。シロは静かに呟いた。

シロは体の具合を確認した。銃弾は手足を掠っただけ。体の中には残っていないようだった。これなら動ける。シロは銃の位置を監視で測った。ホルスターまでは距離がある。ぎりぎりで間に合わないかもしれない。

「残念だ。今さら、本当に今さらなんだが、お前が仲間を誘ってく

れた時、俺は嬉しかったんだぜ」

クロがそう言った。シロは「馬鹿野郎」と言った。

互いに銃を引き寄せた。引き金に力を入れる。

そして、銃声が二つ響いた。

そうしてシロは目を覚ました。

シロは自分が一体どうなったのか、まるで見当が付かなかった。自分が何をしていたのか、何をしようとしていたのかもよく分からない。あるいは既に死んでいるのではないかとも思った。

シロの体が少し動いた。

……痛い。どこが痛いかは分からない。そもそも肉体の感覚が無かった。どうやら死んでいる訳ではなさそうだが、あまりいい状態でも無い。

動けるか？

シロはその身に力を入れてみた。しかしシロの体はぴくりとも動かない。どこに力を入れればいいのか分からないのだ。ただ痛みだけが続く。意識は漫然としてはつきりしない。

シロは記憶の糸を辿ってみることにした。ぼんやりとした光景が見えてくる。それは数時間前の出来事だった。

……神社の境内。そう、確かに博麗神社にいたはずだ。そこまでは覚えている。じゃあ、それからどうした？

様々な情報が飛び交った。それは断片的な記憶のかけらで、時系列もバラバラだった。そんな情報の渦を整理して、シロは、自分は妙な男たちに取り押さえられたのだということを思い出した。神社の鳥居の影から黒装束の男たちが現れた。そして囲まれて……。シロは、その記憶を契機に様々なことを思い出していった。

(……そうだ。クロは死んだのだ)

シロはようやくその瞬間の事を思い出した。シロが自らの手で撃つたのだ。クロは胸から血を流し倒れていった。シロはそれをぼんやりと眺めていた。そしてシロは、クロの死体を森の中に捨てた。木々の隙間から覗くとクロの自慢の背広が赤黒く染まり、割れたサングラスがずれ落ちているのが見えた。

シロは唐突に思い出した。あの男たちが妙な薬を……。

「こんばんわ。あなたに会えて嬉しいわ」
それは女の声だった。

シロは徐々に意識を覚醒させていく。揺らぐ視界に黒が見えた。暗い。森の中にいるようだった。目の前には一人の女。女は木の幹に腰掛けていた。女の目はシロを見下ろしている。……あれは誰だ？ 顔はよく見えない。

ようやくシロは、自分の体が縄で縛られていることに気付いた。瞬間、激痛が走る。その痛みでシロは完全に覚醒した。生きている。まだ、生きている。

視界が開けた。女の顔がはっきり見えた。シロはその顔に覚えがあった。

「……あんたのこと、知ってるぜ。どえらい大物が出てきたもんだ。初めましてか、 八雲さん」

シロは不適に笑ってみせた。シロ自身も、よくここまで強がりな張れたと思った。それもそのはずだ。シロの前にいたのはかの大妖怪、八雲紫だったのだ。

紫は微笑みを浮かべながらシロを見ていた。

「くくく。光栄だね。まさか、最後の最後であんたに会えるとは思っていなかった。あんたが処刑人なのか？」

「いいえ。私はただの見物人よ」にっこりと紫が笑う。

「そうか。やはり俺は死ぬのか」

「ええ、もちろん」八雲紫は言った。「どんな気分かしら？」

愚問だった。紫がその質問に興味があるとは思えなかった。だが紫の瞳はシロを捉えて離さなかった。

「最高の気分だよ」

シロはそのままを答えた。自分で言って、しかし、さして感慨も無かった。

「それは良かったわ」

八雲紫は無邪気に笑った。今度はシロが質問をする。

「あの黒装束は、あんたの部下じゃないのか」

「いいえ。あれは稗田よ。さすがにいい駒を持っているわね。いくらあなたでも太刀打ちできなかったでしょう？」

「らしいな。もつとも、ほとんど覚えちゃいないが」

シロが取り押さえられたのは一瞬の出来ごとだった。何か動いた、それを理解した時には、すでに意識は遠退いていった。

「当然ね。優秀な兵隊とはそういうものよ」

「然りだ。確かに一流だったよ」

名前や、まして顔を見られるなどというのは、二流三流の証だ。

本当に有能な兵隊は、己が兵隊であることさえ明かさない。なるほどプロの戦闘集団とは、ああいう者のことを言うのだろう。シロはむしろ、惚れ惚れするように回想をしていた。

「で？ 何で今頃になって出てきたんだ？」シロは八雲紫に問うた。「全部終わった後じゃないか」

その存在がちらつき始めてから、今まで疑問に思っていた。八雲紫など本来は真っ先に現れてもおかしくない存在だった。そうすれば事件はあっという間に片付いただろう。なぜ動かなかったのか。今まで静観していた理由は何なのだろうか。

「ふふ。あら、そんなことを気にしていたの？」八雲紫は言った。

「そうだな」シロは肩をすくめた。「俺を含めた大勢が疑問に思っているはずだぜ？」

「そうかもね。でも、簡単な話よ？」八雲紫は不敵に笑った。

シロは、まだよく理解できていなかった。八雲紫の意図がどこにあるのか、まるで見当がつかなかった。しかし紫は、そのシロの姿を見て、ますます笑みを濃くしていった。

「いいことを教えてあげるわ。私の場合はね、何か成すために、必ずしも行動が必要とは限らないの」

八雲紫は言った。そして、それこそが紫の“行なった”ことだった。

八雲紫がいつまでも動かないということが、周りの者たちは奇怪

に映った。これほどの事態起きているのに、八雲紫が何もしない。そのことに真つ先に異常を感じたのは、八雲紫の式神、八雲藍だった。放つて置いて良いはずがないのに、主人からの命令はない。藍にとつてそれは不気味であり、だから藍は、主の指示を待たず、独断で行動を始めたのだ。

もちろん、それは他の者たちも同じだった。八雲紫からの言葉はない。ただ飼い犬だけが走り回っている。あまりに不気味で、あまりに不可解。まるで爆発の前兆のようにも思え、何もせずにはいられなかった。だから銘々に犯人を捜し、そして捕らえたのだ。

「これが“本当の力”というものよ、坊や。真に力とはそういうもの。使う必要すら無いの。私はただ、ディナーが運ばれて来るのじつと待つていればいい……」

八雲紫は当然のように言った。八雲紫にとっては珍しい事でもなかったのだった。

何か達成する為に何か行動する必要が無い。望みは口に出さずとも自動的に実現される。

それが可能な者が一体どれだけ存在すると言うのか。ただ何もせず、そこに在るだけで恐怖。一切を凌駕する潜在的な恐怖。そののみが行為を可能にするのだ。あるいはそれを権威を呼ぶことも出来るだろう。しかし、どちらにしろ非人間的であることには違いない。ならば妖怪か？ いいや。それは神と呼ぶのだ。

そこまで考えてシロは気付いた。なるほど。シロの今の状況は、神の前に捧げられた生贄そのものだった。

「……俺は、何をすればいいんだ？」

シロがようやく口を開いた。

「少し、お話をしましょうか」

八雲紫はそつと微笑む。それはまるで、悪戯を思い付いた少女の様な笑みだった。

そこに先ほどまで感じていた威圧はなかった。ころころと姿を変える気紛れさも、あるいは神懸りの的であると思えた。

「ねえ。あなたは どうして神器を売ったのかしら？」八雲紫がシロに問うた。「その必要性が理解できないわ」
「どういう意味だ？」シロは意外な質問に驚く。しかし八雲紫は構わず続けた。

「おかしいわよねえ。だって手放す必要が無いんですもの。まして売るなんて危険な行為、この敵だらけの状況下で、利口な行動とは思えないわ」

すると、八雲紫はわざとらしく困って見せた。意図が見えない。シロは仏頂面で答えた。

「別に意味はねーよ。単にただ働きが嫌だったただけだ」

「そうね。そうとも取れるわ。でも……、あまりに杜撰じゃないかしら。あなたが次の仕事を引き受けざるを得なかったのも、盗品の受け取り手が居なかったからでしょう？　つまり、盗品の扱いに十分気を使っていたからよね？」

それなのになぜ神器を売ったのか。不思議だわ　と、八雲紫は芝居じみた声色で言った。

……内心、シロは驚きを隠せなかった。この女はシロの思った以上にシロの事を知っている。組織の存在も。その取り引きも。シロがなぜこの場にいるのか、その経緯まで含めて、全てを知っているのだ。

「確かに最善じゃあ無かったさ。だが状況が変わったんだ。仕方ねえだろう？」

シロは自身の焦りを悟られない様に慎重に言った。

「いいえ。状況は変わってないわ。むしろ重要性はますます高まっていた。でも　、例えば盗んだ神器を売ることに對して何かメリツトがあるとして、それは一体何かしら？」

八雲紫が挑戦的な笑みを向ける「さあね」とシロは返すが、しかしそれが通ずる相手でもなかった。

「無駄なあがきは良くないわ。私はすでに答えを出している。

私はね、それは“神器を返還すること”だと考えているの。確かに

神器を確実に元の場所に戻す手段としては有効よね。わざわざ自分の足で返したのではリスクがあるし、かと言って道端に捨てたのでは誰に利用されるか分からない。だから、利用価値の無くなった神器を“道具屋に預ける”ことで安全に神器を返したのではないかしら

しかし、ではなぜ神器を返す必要があったのか。八雲紫はシロの裡を射るような視線を向けた。

八雲紫は言う。

「ねえ。あなたが本当に売ったのは、“クロの方”じゃないかしら？」

「……」

シロはその質問には答えなかった。ただ無言を貫いた。しかし、それが既に答えとなっていた。八雲紫は満足そうに続けた。

「あなたは外の世界なんか信じていなかった。もちろん、道具屋もそんな話はしなかった。道具屋の主人と神社の娘は顔見知りよ。わざわざ危険を招く様な事は言わないわ。あなたの目的はただひとつ。神器を返すことで事件を無かった事にしようとしたのよ。全てを水に流そうとした。そしてその為にクロの身柄を引き渡すつもりだった。だけど、交渉を安全に運ぶためには神器を別の場所に保管しておく必要があったし、クロは死んでいなければいけなかった」

シロは何も言わない。もはや、何を言い繕おうと、八雲紫を止められそうになかった。八雲紫はさらに言葉を続けた。

「あなたはただの雇われ者。連中との直接的な繋がりが無い分、クロの死体と神器があれば交渉の余地はあると踏んだ。まあ、実際はこうしてこの場にいるのだけど、考え得る打開策としては悪くなかった。あの時、クロが裏切らなければ、先に引き金を引いたのはあなただったはずよ。あなたは初めからクロの死を勘定に入れていた。あなたはクロの死を望んでいたんだわ」

どう？ 正解？ 八雲紫はそこまで言ってシロの回答を待った。あくまでシロ自身に言わせるつもりらしかった。シロはしばらく

く無言であったが、それが意味の無いことだと悟ると、仕方無く口を開いた。

「……だったら何だって言うんだ。お前には関係ないはずだ」

「そうね。確かに関係ない。別にあなたを責めている訳じゃないわ。ただ、そうだったから、そうだと聞いた。それだけよ」

八雲紫はそつと瞼を閉じた。どうやら納得したようだった。シロはようやく視線を外すことができた。しかし、安堵しかけたシロに、再度、八雲紫の声が届いた、

「でも、もう一度聞いわ。『今は』どんな気分かしら？」

八雲紫は最初の質問を繰り返した。意味が分らなかつた。シロはまた同じ答えを返すつもりだった。最高の気分だ　と、そう言い返すつもりだった。

「……どうしたの？　何故黙っているのかしら？」

シロは、しかし、何故か同じ答えを返すことが出来なかつた。理由は分らない。だが、自分の中の何かが変わつたのだと言う事に気付いた。

焦りか。後悔か。

いずれにしても遅すぎる。

ふいに、胸の奥底から得体の知れないものが込み上げてきた。

「……！？　な、何だ。こりゃあ……？」

焼ける様な激痛が走つた。体の中がおかしい。まるで内臓が擦じ切れそうだった。

「残念。時間切れよ。断罪の時だわ」

八雲紫は冷たく言った。シロは意味を読み取れずにいた。

「どうということだ……？」

「簡単な話よ。既にあなたの体には遅行性の毒薬が流し込まれていたの。時間差で効果が現れ、この世のものとは思えない激痛を伴つて死へ誘う。稗田家自慢の毒物だと言っていたわ」

毒物　？　八雲紫は言つてた。自分は処刑の見物人だと。ならば、すでに刑は執行されており、効果が現れるのを待っていたに過

ぎないのだ。

シロの内から、質量を持った流体が駆けあがってきた。それは血で、切り刻まれた内臓の破片も混じっていた。

「おえッ、おおえッッ!!」

シロはそれを吐いた。しかし、その程度では止まらなかつた。次々にシロの内からそれが駆け上がってくる。口内を鉄の味が満たしていった。胃だか腸だかは分らない。そのまま握りつぶされている様だつた。焼ける、焼ける。体の内が焼かれるように熱かつた。

「……ぐッ、げほッ、げほッ」

気を失いそうな激痛が走る。シロはそのまま地面の上でのた打ち回った。

喉が渴く。水が欲しかつた。

「……く、くそ。陰険な事をしやがって」苦痛に顔を歪めながら言う。「さつさと殺しやがれ」

威勢を張つてみたものの、しかし、また激痛がシロを襲つた。それは耐えられる様なものでは無かつた。どこに力を入れればやり過ぎせるのか分らない。ただ這い上がる激痛を受けとめるしかなかつた。

八雲紫がそんなシロの姿を楽しそうに見ていた。

「ふふふ。あら。私の話を聞いていなかったの？ 私はあなたに何もしないわ。ただあなたを見ているだけ」

八雲紫は平然と言つてのけた。

「……悪趣味め」

「あなたほどではないわ。でも安心なさい。あなたの最後は私が看取つてあげる。……そうね、笑つてあげるわ。無様で滑稽なあなたを。醜く血反吐を撒き散らし、苦しみ悶えて死んでいくあなたを。」

嘲笑つてあげる」

八雲紫はそう言つて紫は嬉しそうに顔を歪めた。口の端が耳まで裂け、三日月の瞳からは狂気の色が覗いていた。

「ふふふ。あははは」

！
嘲笑う八雲紫にシロは懇願した。まるで似つかわしくない言葉。自分ではない様だった。

そんなシロを八雲紫は切り捨てる。

「後悔も反省も必要ないわ。ただ苦しめ。それがあなたに出来る最後の善行」

それは絶望の響きだった。一切の酌量も無いスマートな真実。しかし、それこそがシロの行なってきた事だった。

シロは殺した。相手を陥れ、辱め、徹底的な屈服を味あわせた優位の中で引き金を引いてきた。それに疑問を持ったことは無かった。まして同情などあり得る筈も無かった。

おかしな話だった。そのシロが、八雲紫に同情を求めているのだ。……くつ、嫌だ。そんな俺は、……ぐぞうつ。死にたくない。死にだぐねえよ！！」

自分の体の中がどうなっているのか、最早シロ自身でも分らなかつた。どこが痛いのかも分らない。全てが痛い。気絶しそうなほど痛い。だが、遠のく意識は、やはり激痛によって覚まさせられるのだ。

助けてくれ、クロ。

そう願った。何故だか分らない。シロはクロを殺したのだ。もともと殺すつもりで誘い出し、途中で順序が少し変わったが、やはり予定通り殺したのだ。

自分の手で。自分の銃で。

なのにシロは、クロが助けしてくれることを願ったのだ。

「痛い。痛い。痛い。ちくしょう、痛えよう」

クロは痛く無かつたのだろうか。シロの銃弾を受けて、痛く無かつたのだろうか。

共に外の世界に逃げだそう。

そう言ったのは、全てが嘘だったのだろうか。あるいは、心のどこかで本気で望んでいたのでは無いだろうか。最後の最後まで、ま

だ逃げ道はあると言い聞かせて、己は本気で夢想していたのではないだろうか。

シロの願いは全てが手遅れだった。それこそ間違いがどこから始まったのかも分らない。あるいは、存在そのものが間違いだったのかも知れない。だが、もつと違う結末もあつたのではないかという気持ちは、いつまでも消えてくれなかった。

あの時クロを信じなかった。その選択は正しかったのだろうか？

もう何も分らなかった。

「お願いだ。助けてくれ。頼む、神様ッ！！」

どうか神の慈悲を。

どうか神の慈悲を。

神を笑った男が最後にすがるのが、まさか神そのものだろうとはシロは想像したことも無かった。

「そんなものは存在しないわ。あなたの神は、あなた自身の手で殺したのだから」

八雲紫はそれだけ言った。

「く、くそつ。……痛えよう。痛えよう」

次第に意識が朦朧としてきた。ついにその時が来たようだった。終わる。己の命が終わる。

その先には何も無かった。ただ暗く黒い底なしの空間が広がっていた。シロはそこに突き落とされようとしていたのだ。

「助け……て、神、さ……ま……」

目の前には闇があつた。

しかし、それから先は、もう何も見えなかった。

「……藍。終わったわ」

八雲紫が草陰に言葉を投げた。当然の様に影が紫の前に姿を現した。

「はい。お疲れさまです、紫様。これの処分は如何しますか」

「私の仕事はここまでよ。『標的の死亡を確認した。森を腐らせる前にさっさと持って行け』、稗田にはそう伝えておきなさい」

「畏まりました」

八雲藍はそう答えた。それがシロの最終的な処分だった。

「ところで、奴の素性が掴めました。半分は兎の血が流れているそうです」

八雲藍は主に向かってそう告げた。

「そう。道理で。先祖返りという訳ね」

八雲紫は大した興味も持たずに言った。

「如何致しましょうか。彼女には何と？」

「構わないわ。あれは見かけよりずっと年寄りよ。今さら天秤を動かそうとは考えていないでしょう。放っておきなさい」

「では下の連中はどうします？ 通信を傍受しましたが……」

「くだいわ、藍。言葉のすべてが真実とは限らない。それくらい見当を付けなさい。……いずれ待遇改善の要望書が山のように届くわ。それがこの事件の真相。どれくらい引き出せるかは、彼女たち次第ね」

八雲紫はやはり興味もなさそうに言った。一番妥当な可能性だった。八雲藍はそれで押し黙った。

八雲藍は悟った。主にはもう見えているのだ。これからどうなるのか。式である自分はどう動くべきなのかを。

藍は最後に問うた。

「もう、お帰りになられるのですか」

「そうね。帰って寝るわ。最後にもう一仕事あるから」

八雲紫はその質問には微笑みで返した。やはり、それが一番いい

のかもしれない。八雲藍はそう思った。

「いい夜ね……」

八雲紫が言った。

「そうでしょうか。私には少し蒸し暑いです」

八雲藍はそのままを口にした。すると主は意地悪そうに笑った。

「そう。それでいいわ、藍」

夜風に乗って黄金の長髪が靡いた。藍はそれをしみじみと眺める。八雲紫が振り向いて微笑んだ。その姿は女神の様に美しく、藍は少し妬ましく思った。

「因果ね……。さて、その因果が私を捕まえるのは、一体いつになるのかしら？」

八雲紫が静かに呟いた。

八雲藍は返答することができなかった。

それは誰にも分らないことだった。

雨が明けると、風は夏の匂いがした。

博麗神社はすでに日常を取り戻していた。霊夢は朝の勤めである境内の清掃を行っている。ここ二、三日疎かにしがちであったが、本来、霊夢の仕事といえばこれである。草枯れたとて神の御座す社こうして清潔を保つは、神社としての薄皮一枚の尊厳であった。「ふうっ、こんなものかな」

朝の勤めを終えると、霊夢は一息つくことにした。この時期になると早朝でも蒸し暑い。霊夢は額に浮かんだ汗を拭くと、冷やしてある麦茶を取りに社務所に向かった。

耳を澄ますと、蝉の音が遠くから聞こえた。もう夏になったのだ。霊夢は天を仰ぐようにして静かに瞼を閉じた。

……事件は、まだ進展を見せないようであった。あれから霊夢はすっかり任せることにしたが、神器の所在が気にならぬ筈はない。本当に大丈夫なのかという心配と、大丈夫であってほしいという願いとが、霊夢の頭の中でいつまでも巡っていた。

だが結論はいつも同じである。

(私にはどうすることも出来ないんだ……)

それも知っていた。しかし、知っているが故に、余計に歯痒いだ。

社務所の方から声が聞こえた。

「霊夢ー。朝飯まだかー?」

声の主は魔理沙であった。魔理沙は欠伸と伸びとを同時にこなしながら、霊夢の前に寝癖頭を突き出した。

「奥さんか私は! 自分で用意しなさいよ……!」

「おいおい、何を言っただ。私はトーストしか作れないんだぜ?」

「威張るな! それは作った内に入らない!」

二人の掛け合い漫才はしばらく続いた。

魔理沙は、事件の後から神社に泊まるようになった。霊夢は嫌がったが、どうしても言って聞かなかった。おそらく魔理沙なりの気遣いなのだろう。そして、それもよく理解しているがゆえに、霊夢はよけいに魔理沙を疎んじた。

当然、それは本音ではなかった。

一人の夜はロクでもない考えばかりが浮かぶ。不安が一拳に押し寄せて眠れない。そんなとき、魔理沙が居てくれて助かっている。

無論、口には決して出さないが。

ドライヤーを浴びる魔理沙に、霊夢はふと思いついた。

「ねえ、魔理沙。今日は研究所の講演に出るって言ってなかったけ？」

「……ん？ ああ！ マズイぜ！ 忘れてた！」

魔理沙は実にオーバーなアクションで驚いた。霊夢は、実はコントなのではないかと勘ぐった。

「まったく。昨日あれほど言ってたじゃん」

「ヤベーよ。私の論文の件なんだよ。遅刻したらアリスに消極的殺意じつすされちまう」

そう言うのが早いか、魔理沙は慌ただしく準備を整え始めた。すぐさま箒に乗って飛び出そうという勢いである。

霊夢は重大なことに気が付いた。

「魔理沙、帽子忘れてるって！」

「……！！」

魔理沙はすでに天を翔る星だった。霊夢の提言は空しく虚空に響いた。元気な星である。およそ乙女の門出には思えなかった。

そうして霊夢は一人になった。

「どうすんのよ、これ」

魔理沙の忘れていった帽子を持って、霊夢は半ば呆然としていた。我が友ながら落ち着きのない限りである。いつそ帽子に悪戯でもしてみようかという気になる。

霊夢はそのくたびれた帽子に頭を入れてみた。それは大きな帽子であった。霊夢の顔ごと帽子の中に入り込んでしまう。当然ながら中は暗くて何も見えない。若干、音もくぐもって聞こえる。これならば誰にも見られない。およそ泣き言を言うのには最適に思えた。

(私、どうなっちゃうんだろ……?)

まず、それだった。どれだけ平気な振りをしようとも、それが霊夢の素直な気持ちだった。

慧音は言った。神器の存在は博麗神社の継承に必須であり、それが無い限り霊夢はいつまで経っても巫女さんのままであると。一人前の神職を目指していた霊夢にとって、それは耐えがたい屈辱であった。否、もうすでに巫女さんでいられるかすらも怪しいのだった。

(私の神社、大丈夫なのかな……)

継承者を失い、たった一つの尊厳も失った。そんな博麗神社に、果たして人々の信仰は集まるだろうか。

無理だろうというのが霊夢の予想だった。今までもギリギリの綱渡りのように持たせてきたのだ。今度ばかりはもう駄目な気がした。今までの信仰も、歴史も、自分の代で途絶えさせてしまうのが不甲斐無い。情けない限りであった。

しかし、これほどまでに霊夢を不安にさせているものの正体は、それではなかった。それは余りに幼く、恥ずかしくて魔理沙にも言えないものだった。だが霊夢は今まさに、それについて思い悩んでいたのだ。

……風が、舞った。

帽子を取ると、目の前の空間が歪んで見えた。ひどく不気味な気配。霊夢はその気配をよく知っていた。

(やっと、やっと来てくれた……!)

背景が割れた。歪みが轟々と空間を圧縮する。現れた女は、何事

も無かったような涼しい顔をしていた。女は霊夢の姿を確認すると、侮蔑に満ちた眼で笑う。霊夢は、自分が今、どんな顔をしているのかを思い出した。堪らなくなって目を伏せた。

「情けない顔ね。霊夢」

「……」

八雲紫の第一声はそれだった。少なくともそれは、盗難被害にあつたばかりの人間に言う言葉ではない。だが、それこそ紫らしいと霊夢は思った。

「何してのさ……」

「何のことかしら？」

「はぐらかさないで。本当は全部知ってるくせに」

霊夢は八雲紫を睨んだ。これほど待ち望んだ対面に、しかし霊夢は子供の様な態度をとる。紫は一層笑みを深めた。

「さあ？ 何のことか分からないけど。でも、あなたが求めているのはこれのことかしら？」

八雲紫の腕から紺の物体が放られた。綺麗な放物線を描いたそれを、霊夢は慌てて受け止める。両手にすっぽりと落ちたそれは、今、霊夢に最も必要なものだった。

全身を強張らせていた妙な力が抜ける。せめて、それだけ言うのが精一杯だった。

「ありがとう……！ ありがとう……！」

「何よ、霊夢。どうかしやっただのかしら？」

霊夢は半ば泣き出しそうな勢いだった。これを求めて、これだけを求めて、霊夢は身の丈に合わない行動に出たのだ。恐怖がどつと蘇る。恐ろしい体験をした。思い出すと震えが止まらなくなった。

だが、八雲紫の次の言葉は、霊夢にとって予想外のものだった。

「……借りたのよ。それ。私が借りたの」

「え？」

「少し用があつてね。今までずっと私が使っていたの」

「嘘……」

『信じられない』。今の霊夢の心境を表現するにこれほど適切な言葉は無いだろう。霊夢はまさしく、全身でそれを表現してみせた。目を見開いた。口は開けたままだ。しばらくして耳の異常を疑った。ついでに頬を抓ってみる。何をやっても理解が追いつかないので、もう一度紫に催促した。

「だから、それは私が借りていたの。一応断ろうかと思ったんだけどね。あなた、ぐっすり眠っていたから」

「そんなことって……」

まさか、であった。事件について色々な憶測はしてみたものの、このような結末は予想していなかった。霊夢は困惑を隠せない。まず、何をどう質せば納得がいくのだろうか。ひとまず霊夢はもう一度確認することにした。

「じゃあ。じゃあ事件なんて初めから無かったって言うの？ 問題なんて何も無かったって言うの？」

「そういうことよ。だってそうでしょう？ 幻想郷は」

八雲紫はうつすらと瞼を閉じた。

そう。これはほんの戯言である。

八雲紫は全てを知っていた。全てを知って、霊夢に行動を許した。それが必要だと判断したから、霊夢の自由を保証した。そして予定通りに霊夢は動き、かつ予定通りに行動を終えた。結果は紫にとって満足のいくものだった。

だからこそ、紫はここに来たのだった。普段の暢気なこの娘を、これほど頑なにさせていたものを取り除きに。不安に震える霊夢に、全てを清算するであろうこの言葉を告げに。

稗田にも道具屋にも圧力をかけて黙らせた。もういいだろう。もう日常を返還してやろう。紫はそれでもいいと思った。

そう。これはほんの戯言である。

「……幻想郷は、今日も平和よ　？」

そして、霊夢はその場へたり込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824u/>

博麗神社神器盗難事件

2011年7月26日03時16分発行